

「ひとつひとつの花が一生懸命咲こうとしているのなら、 切らずに全部咲かせてやろう。 ひとつひとつの花が小さくてもいいじゃないか」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 若手の先生方に思うこと

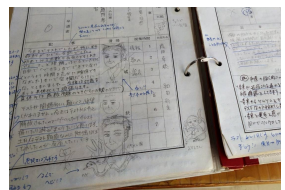
地方公務員法によって、職員の採用はすべて条件付のものとされ、『採用後6ヶ月を良好な成績で勤務したときに初めて正式採用となる』と定められています。しかも、公立の教諭については初任者研修の創設に伴い、条件付の期間は1年とされています。東高で言えば、吉本先生がこれにあたるわけですが、授業、部活動の指導、クラス担任と何事にも前向きに取り組んでいる姿が目につきます。現状にとどまることなく、2年目、3年目とキャリアにふさわしい進化をしてくれればいいな、と今は願うばかりですね。

一方、若い頃の私は得意と苦手の差が激しく、凸凹の目立つ教員であったと思います。生徒指導こそ1年でそれなりになりましたが、あとは全然でした。やがて授業がある程度「カタチ」になったのが5年目、翌年に部活動指導が「サマ」になり、「何でも来い」と言えるようになったのは6年目くらいでしょうか。

ちなみに、有り難いことに私の出会った先輩方は誰1人として「教員はそれさえできればええんや」とは仰られませんでした。「何でもできる人間になれ」そう教わりました。大きな花を咲かせるには小さい花をすべて切り落とし、ひとつの花だけを残したらいい、とはよく聞いた話ですが、「いやいや、それではあんたは大きくならん」という見立てですね。お蔭で私は小さい花をいくつも抱えることとなりました。

さらに、厳しく指導されたのが立ち居振る舞いについてでした。「あんたはサクラなんや」そう言われました。「咲いても散っても人目をひく、自分がそういう人間だと自覚して行動せなあかん。感情的な物言いをしたり、いい気になったり、腐ったり。時に派手な服装をしたり、だらしない格好をしたりするのも同じや。あんたの姿を子ども達はずっと見てる。そんなのを大人として正しい姿やと思わせたいんか」もう30年以上も昔のことになりましたが、今もなお忘れられない大切な教えです。

だから、理数科のポスターセッションなどの場面で、生徒に伝えたい時があります。「今、松田先生に注目やな」と。発表を聞く目がぎゅっとなって、やたらと凛々しい表情になるのです。「大人として正しい顔つきだ」と思います。たまらなく羨ましい瞬間です。



羨ましいと言えば、人権HRを見せていただいているとき、ふと目にしてしまった津國先生のクラスの学級日誌もなかなか羨ましいものがありました。そこには生徒達と津國先生との心の通い合いが読み取れたからです。そう言えば、ちらっと盗み見た横山先生のクラスの学級日誌もなかなかのものでした。

そうそう、あまり大きな声では言えませんが、私の家には担任していたクラスの学級日誌がほぼほぼ保管してあります。学級日誌は公文書ではありますが、学校に備えるべき表簿として法令等に定められたものではなく、保存期間も曖昧な存在です。それもあって「捨てるのなら自分のものに…」と考えたのです。当時、生徒にはよく言ったものです。「僕の老後の楽しみにとっておくんだから、しっかり書いてや」と。

あの頃、何気なく口にしていた『老後』は近づきつつあります。『最後の最後まで、学級通信を書きながら担任を務めること。国語の先生として言葉の力を伝えること。放課後はグラウンドに立ち続けること』今にして思えば、そんな当初の計画とは随分違う人生になってしまいました。それでも多くの子ども達の成長に立ち会えたこと、多くの魅力的な先輩や後輩に出会い、学び続けられたことは何よりの財産です。すべては自分次第。どんな働き方になるとしても自己の成長を感じられる、そんな歳月を重ねたいですね。

「素敵なことは素敵なのです」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ SSH研究発表会、お疲れ様でした

もう1月以上前の出来事になってしまったSSH研究発表会。加古川市民会館をお借りして、その壇上から全校生徒を前に発表するという経験はそう何度もできるものではない言わば晴れの舞台です。選ばれた選りすぐりの6チームの発表を前に、何を伝えるのが正解か、いつもながら悩ましい私からの挨拶です。

こんにちは。本日はSSH研究発表会ということで市民会館にお集まりいただき、有り難うございます。昔昔、僕は国語の先生でした。武器はトーク&チョーク。いかに教え伝えるか、それが学びだと思っていました。そのあと、僕は教育委員会に入ってSSHの担当となりました。その学びは驚きでしたね。教え伝える学びではないのです。生徒たちが「これって、なぜこうなるんだろう？」と疑問を発し、その解決に向けて取り組む。それまでの自分の常識が覆りました。そのうえ、生徒は実に楽しそうなんです。

平成17年には加古川東高校からSSHの申請をしたいと相談があり、ともに頭を悩ませました。結果として、平成18年、東高も無事に指定校となりました。以来、19年目を迎えたところです。この間、着実に歩みを進めてこられたのは東高の先生方に加えて、本日ご参加いただいている運営指導委員の先生方のあたたかいご指導と、それに応えてきた皆さんの先輩方のご努力のお蔭です。有り難いですね。

さあ、今日も6本の発表があります。素晴らしい発表ばかりです。皆さんの仲間の学びの成果を全身で味わいましょう、という言葉をもって僕からの開会の挨拶とします。いい時間にしましょうね。

『トーク&チョーク』がなぜか生徒に受けてしまいました。でも、当時の私の武器は授業の合間に挟むプチ哲学的な雑談と白・黄色・青・赤・緑という定番に、蛍光オレンジと蛍光グリーンを加えた計7色のチョーク。そう言えば「白衣と言えれば理科の先生」というイメージを打ち破るように、常に白衣を纏う地歴公民の畑山先生にその理由を訊ねたことがあります。「白衣がないと、服がチョークまみれになりますから…」とのこと。確かにその通りですね。そこまで気が回らない、かつての自分を思い返しました。

さて、当日はどれも工夫に満ちた素敵な発表ばかりでしたが、STEAM特講・起業家ワークショップ班の『「自分らしく」ファッションブルを生きるシニア向けブランド COLOMO』の発表はさすがでしたね。スタートアップチャレンジ甲子園で優秀賞をいただいただけのことはあります。「シニア世代の方が自分らしく生きることを衣服の観点からお手伝いしたい」という、そもそもの動機に心惹かれます。拍手です。

○ 探究活動研究会も、お疲れ様でした

翌日には神戸市内で『兵庫県高等学校探究活動研究会』がありました。探究と言えばSSH指定校を中心に、どうしても理系に偏りがちなイメージがありますが、STEAMに代表される文理融合的な学びを推進するべく、県教委が昨年度から企画していたのがこの企画です。果たして会場には公私立で70校を超える学校の生徒が集いました。至るところでポスターセッションを交互に繰り広げる様子は圧巻でした。

東高からは普通科探究の8R1班が『「利便性を高めた新しい缶詰「楽缶 楽ちゃんじゃないとA CAN!!」の開発』で出場。きちんと試作品を携えての発表は説得力あるものでした。日常の困りごとをいかに克服するかがテーマ。この日も拍手です。



そうそう、帰り道に生徒の1人に話しかけられます。「校長先生の通信、横山先生から話は聞いていて、読みたかったんですよ。読めるようになって嬉しいです」と。どこか気恥ずかしくて、うまく返事ができなかったけど、本当はとても嬉しかったです。「有り難う。でも、君らの輝きには全然かなわんけどね」

「ありがとう、77 回生」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 卒業式で私が伝えなかったこと

卒業式の式辞でどのようなことを伝えるか、式の前日までさんざん悩んでいた私ですが、壇上に立ち、式辞の包み紙をひらく前に何を口にするべきかについては、少しの逡巡もありませんでした。

「おはようございます。ありがとう、この声です。皆さんのこの返事の声です。4月8日の始業式、このステージに立った私は『果たして自分に、東高の校長が務まるのかな…』そういう不安でいっぱいでした。でも、皆さんの声を聴いた時、励まされたんです。それが始まりです。だから本当に今まで『ありがとう』」



初心者マークの私を励ましてくれたあの挨拶への返しに私はお礼を伝えなかったのです。あとで来賓の方から「あそこから入るんですね」と驚かれましたが、私はそれがいちばん伝えなかったのです。あらためての感謝の念とともに式辞を開きました。自分の思いをさんざん盛り込んだ式辞。いつもと同じですね。

本校における三年間の課程を修了し、ただ今、卒業証書を授与しました第七十七回生 三一五名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

皆さんは、この学び舎での高校生活で、多くのことを学び、様々な体験をし、大きく成長してこられました。日々の授業や部活動に精一杯、取り組んできたことはもちろんですが、文化部発表会、体育祭、球技大会などの大きな学校行事では生徒会を中心として、企画、運営の全てを生徒の皆さんの力だけでやり遂げてきました。このことは本校の伝統であり、それこそが紛れもなく東高生としての誇りです。

特に今年度の体育祭では、77 回生の皆さんが中心となって行なった応援合戦は強く印象に残りました。赤、青、緑、黄の四つの団のパフォーマンスや衣装はどれも素晴らしく、団長をはじめ団幹部の優勝を狙う強い意気込みと、その思いをしっかりと受け止める生徒の皆さんの思いとが重なり合う様子は、見ている私たちの心をしっかりと捉えて離さない熱さ溢れるものでした。

加えて、今年度は本校創立百周年の年ということで、歴代の先輩方から母校愛がぎゅっと詰まった、重い重いバトンを引き継がせていただく記念式典もありました。式典での皆さんの規律ある真摯な振るまいは多くの来賓の方々から、お褒めの言葉をいただきました。私たち教職員にとっても実に誇らしい姿を見せてくれたこと、心から感謝します。そして今もまた、皆さんは高校生活の成果としてそれぞれが希望する進路実現を果たそうとしています。このこともとても嬉しく感謝しています。ありがとうございます。

さて、私たちは今や混沌のなかを生きていると言えます。世界に目を向けるとグローバル化、技術革新の進展など、時代は激しく変化しています。また、年々不安定化しつつあるように思える世界情勢のこれからは大いに懸念されます。また、様々な感染症に日常を奪われることもあります。

さらに、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの巨大地震や西日本豪雨などに打ちひしがれた平成の世から、新たな令和の世に移りましたが、能登半島沖地震などの自然災害は依然として絶えることはなく、毎年のように各地に甚大な被害をもたらしています。自然の猛威に対する人間の無力さを改めて感じるとともに、安心安全に暮らせることの大切さをひしひしとを感じる日々が続いています。

皆さんが今後歩いていく道においては、予測の難しい局面に多々出会うことと思います。その中でも皆さんには、想定外の事象とまっすぐに向き合い対応する力を育み、模範解答のない、正解の解らない不透明な未来を自らの手で切り拓き、地域を、日本を、そして世界を支える人材として、組織や社会の中でリーダーとして活躍するとともに、愛おしい自分らしい豊かな人生を送って欲しいと願っています。

その実現のために今から『心がけてほしい生き方』について、私から三つほど話したいと思います。

一つ目は、『言葉を大切に生きていくこと』です。私たちは日々、様々なものに触れ、心が動きます。その心の動きをぜひ言語化する習慣をつけてください。「よかった」とか「よくなかった」とか、そのような言葉だけで日常を語ることはもちろん可能です。それでも年を重ねて、やがて自身の歩んだ道を振り返るとき、ひとつひとつの場面をそのどちらかの言葉でしか語れない人生は薄っぺらく、味気ないものと思います。一方で豊かな言葉は日々を豊かにします。

何の変哲もないように見える一日一日を、彩り鮮やかに語れるよう、書物を読み、語彙を蓄え、目に映るものすべてを自分なりの言葉で記し残してください。そこに在るのはAIなどの人工的なものでは語れない、生身の自分だけの人生だと思うからです。皆さんには誰かに『語れる人生』を歩んでほしいと、そう願っています。

二つ目は、『周りの人を大切に生きていくこと』です。何かを成し遂げようとする際、自分一人の力では限界があります。そのような時、周囲の仲間を巻き込みながら立ち向かう際に必要となるものは何か。人間的魅力です。「この人とともにありたい」と思わせる安心感、信頼感、それらを身につけることこそが本校の校訓『明朗親和』が求める精神です。

隣の人を大切に思えない人は、隣の人から大切にされてはもらえません。当たり前のことですよね。皆さんには周囲の方を大切にすると同時に周囲の方から大切にされ、ともに繋がりあいながら、「在りたい未来」を築いていく、そんな『支え合い、高め合う人生』を歩んでほしいと願っています。

三つ目は、『生命そのものを大切にすること』です。阪神・淡路大震災で被災した私は、生命のはかなさを思い知りました。それまでの私は、生命は「物語と順番」を大切にしてくれるものと思っていました。人は生まれ、見守られながらよちよち歩きを始め、やがて独り歩きができるようになった後、老いたり病んだりした末に静かに生命を閉じる、そういうものであると思っていました。しかし、現実とは違いました。

大地震は何の前触れもなく瞬時に多くの生命を奪っていきました。今を盛りと輝いている人が「少し待ってほしい」と言っても聞いてはくれません。物語はストーリーの途中であっても、突然に幕を閉じてしまうことがあるのです。また、その際、順番などもまったく考慮してはくれません。

私たちは親から授かった生命を精いっぱい大切に、慈しみ、できることなら新しい世代に引き継ぎたいと考えています。しかし、新しい世代に引き継ぐどころか、自身の生命を全うすることもできず、親を見送ることもできないまま、この世から引き剥がされてしまうことがあります。そのときの無念さは察するにあまりあるものがあります。どうか、『誰のものでもなく、自分だけに与えられたかけがえのない生命を大切にしてほしい』そう願っています。

以上三つのことを、巣立ち行く 77 回生への、餞の言葉といたします。

卒業式の前日、ひとりの3年生が校長室に受験結果を報告しに来てくれました。探究の時間に、校長室で自分の将来の夢を語ってくれた生徒です。「あの時、校長先生に聴いてもらった夢に一步近づくことができました。明日の呼名のとき、お礼の気持ちを込めて大きな声で返事をしますね」

式当日は本当に大きな声で返事をしてくれたので、思いがけず壇上で笑ってしまいました。77 回生の皆さん、本当にありがとう。いつの日か315 個の夢がひとつ残らず叶いますように。



「いろんな顔をもっているから」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ これまた、昔話です

私が陸上競技部の顧問だった頃の話です。30代に差し掛かるあたりから生徒の御蔭で毎年、全国大会や近畿大会に参加させてもらうようになった私は、指導力のある顧問のように周囲の方から扱っていただいていた。何校かが集まる合同合宿などでも指導を任せていただき、多くの学校の生徒に関わることとなりました。そのときにいつも気になる学校がありました。それが東高です。

ちょっと厳しめのメニューを提案すると、普通の高校生は顔をしかめたりします。でも、東高の生徒は「きたでえ」とか口にしながらか、何処か嬉しそうなのです。それは指導する側としては、これ以上ない楽しい反応です。その前向きさと明朗さ。加えて、私も教員ですから、東高の進学実績などは知っていました。だから単純に思っていました。「ああ、これが東播磨を代表する伝統校の生徒の姿なんだな…」と。

その後、指導主事になった私はSSHの担当をさせていただいた御蔭で、東高が『机上の学問重視』の姿勢から進化していこうとする過程に立ち会いました。文化部発表会や体育祭といった華のある行事や、それをしっかりと支える生徒会の存在も聞き知りました。令和2年からは県のSTEAM教育推進モデル校として文理融合型の学びに取り組み、さらに学びの幅を広げていく様子も見せていただきました。

だから4月に東高に赴任することとなった際、喜びよりも肩が重かったですね。『文武両道の伝統校。しかもSSHの代表校として中間評価をされる年。さらにSTEAM教育の先進校。加えて100周年…』。悶々とする私に人権教育課の今川副課長はサラリと付け加えます。「そりゃ、加古川東の看板といったら人権教育ですよ。ぜひ見に行かせてくださいね」。



○ ようやくしっかりと向き合えた人権HRにて

年間に1年生は4回、2年生は3回、3年生は2回実施する東高の人権HR。きまって出張等が入り、垣間見しかできなかった人権HRに存分に立ち会えることができたのは、1月の終わりでした。心から嬉しくてその日、私は1年生のすべての教室をひたすら回らせてもらいました。



自分の得た情報をクラスメイトに真摯に伝えようとする生徒の顔、その情報を自分のものにしようと集中して耳を傾ける生徒の顔をさんざんに見せてもらいました。指針として『テーマについては部落問題を尊重する』と掲げ、人権HRに真摯に取り組む東高の姿勢は兵庫県全体を通じても希有なものです。1年生の成長も十分に感じられました。

私は初任校が但馬でした。大学時代に学びの延長で八鹿事件について多く書物を読みましたが、そのなかでお名前を知った方に複数お会いし、ともに働かせてもらうことができました。巷には出回っていない当時の資料が残してある部屋に泊めてもらったこともあります。みな優しく、素敵な先輩達でした。その八鹿事件が発生する2年前の昭和47年に始まった東高の人権学習。半世紀の歩みは重たいですね。

○ いろんな顔をもっているから...

文武両道の伝統校ならそれなりに溢れています。でも、『探究的な学びに力を入れています』という要素を加えてふるいに掛けると、それなりに数は減ります。そのうえに『人権教育にも力を入れています』という要素を加えると、果たして何校が残るのだろう、ということを考えたりします。

『何処が好き?』って訊かれて、答えに窮することありますよね。来週月曜は理数科の推薦入学です。募集定員40名の枠に昨年度より8人多い72人が挑んでくれます。彼らは何を求めて東高を選んでいるのか。ひとつの言葉で括れないくらい、魅力的な顔をいくつももっていること、誇らしく嬉しく思っています。

「こころの温度が少しあがる」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ ある朝、驚いたこと

ある朝、出勤して、いつものように校長室の扉をひらいたとき、通りかかった生徒が訊ねてくれました。「校長先生。これ、なんですか？」 4月以来、校長室の扉に1週間の自分のスケジュールを記したプレートをかけていましたが、さらに1枚新たなものが設置されていたのです。すべて写真のなかの私が何かメッセージを伝えようとしています。全部で4枚。

『1日いません』『今はいません』『大事なお仕事中』そして『生徒OK』。誰が作成したのかはすぐにピンとききました。台湾研修と一緒にいった1年生の生徒たちですね。「先生向けのスケジュール表だけでなく、私達向けのも欲しいんです」と言っていましたから。



思えば当初は扉を全開にしていました。すると有り難いことに、顔を覗かせて挨拶してくれる生徒が少なからずいましたし、校長室に入ってきて話をしてくれる生徒もいました。そこから夏と秋が過ぎ、さすがに冬の廊下からの空気があまりに冷たいので、最近は扉をほぼ閉めています。「それだと、いつ校長室に遊びにいいいか解らなくて困ってるんです」とのこと。この実力行使について、とりあえず認めることにしました。写真入りは気恥ずかしく、遊ばれている気もしますが、そんなに嫌ではなかったのです。

○ そう言えば...

通信 36 号に掲載させてもらったオープンハイスクール参加者の感想をまとめたA I 要約図。「わかりやすいものを作っていただき、有り難うございます」そう藤井先生に伝えると、「いやいや、アンケート用紙に書かれたことをすべて打ち込んでくれた、阿野先生の御蔭ですよ」と返されます。

修学旅行の担当であった岩本先生に「無理したらあかんで」と言いながら仕事を引き取っておられる上田先生に「有り難うございます」と伝えると、「放っておいたら彼は頑張りすぎるから、僕はできることを手伝っているだけです」そう笑い飛ばしてくれます。その上田先生が体育館でひたすらバドミントン部の生徒を鍛えているとき、隣で津國先生は散らばったシャトルを黙々と拾い集めていましたっけ。

腕を組み、バスケットボール部の生徒に熱く指導している松下先生の隣の椅子には生徒を優しく見つめる鵜飼先生がおられます。前川先生はコート周りを歩き回りながらルーズボール等に注意を払っています。あの三者三様に生徒の活動を見守る姿が好きな私は、時間があると体育館を覗いてみたりします。

震災追悼行事のあと、和田先生が伝えてくれます。「僕みたいな者がこんなことを言うのもなんですが、校長先生の今日の話はすごくよかったです」と。上岡先生は放送部の生徒とともに校長室に来てくれました。生徒がお願いしてくれます。「先生のお話、心にぐっと迫るものでした。番組にさせてください」と。

仕事納めの日、わざわざ校長室に寄ってくれた榮先生は「良いお年を」と声を掛けてくれました。仕事始めの日は「今年もお願いします」でした。こういったことすべてが私のこころの温度をあげてくれます。

77 回生の卒業認定会議が終わり、第3学年に在籍する 315 名全員の卒業が見えてきました。主任の大西先生をはじめとする学年団の先生方に深く感謝するとともに、遠隔授業を始めた頃から生徒にしっかりと寄り添っておられた加藤先生のことを思います。考査の時などは無事に登校できるかを心配して、玄関でひとり佇んでおられたその姿を思い出します。ああいった光景に私がどれだけ勇気づけられたことか。

気づけば今年度も残りふた月です。人より賢いわけでもなく、何か特別な武器も持たない私ですが、生徒や先生方にこころの温度をあげてもらいながら、ここまで辿り着きました。日々、感謝しています。

「探究デー、お疲れ様でした」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 探究的な学びのシンカ

以前の通信に書かせていただきましたね。新人指導主事の私の担当は発展的統合などといった教育行政的な仕事ばかりで、教員出身らしい仕事と言えばSSHの指導くらいであったと。そのうえ当初、県立の指定校は神戸高校1校でした。今や兵庫県全体の指定校は全国2位の16校です。隔世の感ありですね。

SSHの面白いところは、科学や技術の分野で国際的に活躍しうる人材の育成を目的とし、学校独自の探究型のカリキュラム開発が行えるところです。具体的には「総合的な学習の時間(当時)」や「理科課題研究」などの時間に学校裁量の探究科目を設定することで、従来の知識伝達型の授業からの脱却をめざすことができたのです。東高も平成17年に申請書作成にとりかかり、国のヒアリング等を経て平成18年に指定校となりました。と言っても、当時は理数コースの生徒のみ、理数教科のみを対象としていました。

だから先々週の『探究デー』の光景は驚きとともに喜びでした。普通科の1、2年生全員が丸1日かけて探究的に学ぶ時代が来るとは、20年前の私には想像すらできなかったことです。多くの先生方の粘り強い取り組みが、探究の学びをこうした裾野の広いものにしたのですよね。学びは進化、深化しています。



体育館に集まり、それぞれの班の研究成果をポスターにまとめて発表した2年生の姿も実に頼もしいものでした。個人的には「セアカコケグモの生息分布」や「学生食堂の利用促進」、「食物アレルギー患者のための外食用アプリ開発」、「教科毎のイメージカラー」等が興味深かったですね。



視察に来られた他校の先生から話しかけられます。「もっとも印象的なのは、生徒さんの学ぶ表情ですね。実に楽しそうです。あの光景を見られたこと、くわえて傍士先生から探究について詳しくお話を聴けたのは収穫です。本校でもさらに探究的な学びを進めていけそうです」と。傍士先生は探究の先駆者ですからね。お話ししてもらえて何よりでした。

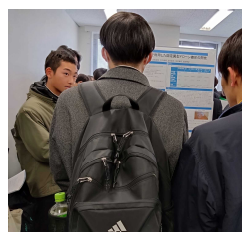
こうして校内にいる者としては「うまくいっている」と思える東高での探究的な学び。それでも今年はひとつ大きな山がありました。SSH第4期指定の3年目と言うことで、国からの中間評価を受ける年なのです。ここで「今ひとつの評価」を受けるとこれまで20年近く享受してきた国からの支援が止まってしまうこともあります。だから昨年9月のヒアリングの日は、東高にとって大きな勝負の日と言えました。

資料はいつもながら新先生がまとめてくれました。東高の生徒の学びと先生方の支援・指導が見える、いい資料です。となると不安材料はひとつだけ。文部科学省から事前に届いた留意事項への対応のみです。

ヒアリング当日は、本事業の取組状況について、原則として学校責任者から説明をお願いすることとなります。その後、質疑応答等については、学校からの回答は原則学校責任者とする。

45分のヒアリングのうち県教委が説明する2分を除いた43分間。どんな質疑応答であったかは覚えていません。ただ、その結果は先週末に届きました。詳細は次回の職員会議でお伝えしますが、対象校47校のうち『ねらいの達成が可能』と評価されたのは7校のみで、東高の名前はその中にありました。ちなみに他の6校は東高より指定期間の短い学校ばかりです。進化、深化を長く続けることの難しさ故ですね。

嬉しいよりも私はただ安堵感でいっぱいでした。ちなみに新先生はこうした業績が認められ、本日午後に東灘区文化センターで開催される『兵庫県優秀教職員表彰式』に出席されることとなりました。これは東高としても嬉しい話です。新先生、おめでとうございます。



「どうかサクラ咲きますように」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 情報交換会での話

先日、県教育委員会が主催する『自殺予防教育担当者研修会』がありました。県内でも近年、生徒の自死が増えています。そこで、「心の危機に気付く力」と「相談する力」を生徒に身につけてもらうことが喫緊の課題となっているため、県内の各校の先生方が集まり、ともに学ぶ研修です。

去年までの私はそういった研修を主催する側であり、出席したかったのですが当日は他の会議があるため、参加は見送りました。ただ、講師の方々は今まで私がお世話になった方ばかりで、夕刻には文部科学省の方もまじえての情報交換会をするとのことで、「そちらの会だけでも参加を…」と誘われました。

その会の席上、「何か自殺予防の取組をしていますか」と問われます。私は「実は生徒集会などでは『生きて、今日もこうして集まってくれて有り難う』的な話しかしていないんです…」と打ち明けました。ある校長先生からは「加古川東でそんな話をするんですか」と驚かれましたが、皆さんが知ってのとおり私はその類いの話ばかりですよ。周囲の反応に戸惑っていると昔から県の『いじめ基本方針』の策定等で、中心的な役割を果たしてこられた大学教授が笑いながら言ってくれます。「新谷さんらしいよな」と。

○ 3年生の学年集会での話

そんな私ですが、共通テストの前日、77 回生の学年集会で「激励の言葉を伝えて欲しい」との依頼を大西先生から受けました。校長になって初めて、生命や生き方以外の話を生徒にすることとなったのです。

まずは皆さんが今日集まってくれたことに感謝します。また、私に時間をくださった3学年の先生方に感謝します。40 年近く前に共通テストの前身となる試験を受けた僕から、皆さんに少しだけ話をします。

僕も当時は高校3年生でした。いきたい大学がありました。でも、そこに出願するためにはその前の共通一次試験で一定の点数をとる必要があります。国語、数学、英語と理科2科目、社会2科目。年明けからはずっと緊張しっぱなしでした。なんせいわゆる現役生です。準備万端という気分ではありません。

試験会場に入ると、広い教室内には多くの受験生がいます。知らない顔ばかりですが、みな賢そうに見えます。休憩時間になると知っている者同士で「できた、できた」という話をしています。自分だけが「できない子」のように思うことが何度もありました。でも、覚えていてください。彼らは敵ではないのです。

山登りと同じです。皆それぞれ、目指す頂上は違うのです。大切なことは誰かとの比較ではなくて、自分が目指す頂上に一步步近づいていくことなのです。できそうな問題をしっかりと解く、それだけで頂上は近づいてきます。そんなイメージで丁寧に取り組んでもらえたらいいな、そう思っています。

皆さんにはこうして集まってくれる仲間や、心から皆さんの成功を願う先生方や保護者の方がついていきます。「自分を試されている」というより「自分の思いを試している」そんな気持ちで会場に向かってくれたら嬉しいな、という言葉をもって皆さんへの激励の言葉とさせていただきます。がんばってね。

312 人が挑む共通テストを前に、清流百周年記念館に集まってくれた 77 回生。「しっかり準備してきたんだから、皆さんは大丈夫です」と池田先生はあたたかく力強い太鼓判。大西先生はどんな願いも叶うというブラジルの最強の呪文『シンパティアス』を披露。皆で唱えてみました。大澤先生からは「困った時は大切な人の笑顔を思い出すこと」との言葉。それぞれ大切な人、いますもんね。

果たして、好スタートを切れた生徒が多いようです。どうかサクラ咲きますように。



「震災追悼行事で生徒に伝えたこと」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 震災追悼行事で生徒に伝えたこと

最初は原稿を書いていたのです。阪神淡路大震災から30年となる節目の追悼行事。でも、どれだけ言葉を尽くしても『震災を経験した私から、震災を経験していない皆さんへ』となってしまうのです。説教くさいというか、昔話を後世に押しつけていると言うか、何処か上からの目線です。何度も書き直してはみたものの、結論は「これじゃあ、何も伝わらないな」との思い。では、今を生きる生徒たちに、私が感じたあの切迫感を伝えるにはどうすればよいか。辿り着いた結論は30年前の自分に頼ることでした。

阪神淡路大震災のあった年、僕は高校2年生の担任をしていました。当時の僕は学級通信を書くのが大好きな担任でした。当時のファイルを見ると、震災のあった当日の「1995年1月17日付け」の学級通信があります。でも、それは準備していたものの、朝5時46分にマグニチュード7、3にして、6434人の生命を奪う地震があり、誰も登校ができないままに学校は休校。結果として配ることができなかった幻の学級通信です。そして次の号の日付は1月25日となっています。それが震災後の初の登校日です。すから、1週間は学校を開けられなかったということになります。

今日はこの1月25日付けの学級通信の一部を読ませてもらいます。27歳だった僕が、17歳の生徒に向けて書いた通信です。タイトルは『今、いちばん考えておいてほしいこと』

地震の直後、僕は完全にタンスの下敷きになっていた。部屋中のタンスが全て僕に倒れかかって、そのうちの一つは頭を直撃していた。やばいな、そう思いながらもそこから抜け出すのに随分と時間がかかった。妻は殆どパニック状態になりながら、その脱出を助けてくれた。僕らはとにかく手探りで車のキーを見つけると、すぐに暗闇の中へ出た。古い木造の妻の実家が気になったからだ。

車を走らせる。人々が右往左往しているものの、尼崎市内は比較的落ち着いていたように思う。橋を渡り、西宮へ。そこで僕らはすっかり崩れきった妻の実家を見つけた。泣き叫ぶ妻の肩を叩きながら、車を止めて降りた。庭におとうさんがいた。おかあさんはまだ家から出られないでいた。

『いや、なんとか僕一人でも出せる。それより泰子（妹）を病院に連れていったってや』そう、おとうさんが言う。泰子はあちこちから血を流している。タオルで縛って、車に乗せ、病院を探した。

兵庫医大の大学病院なら空いているだろう、そう考えて南を目指すけれど甲子園口の駅前には、倒壊したビルが塞いでいて通り抜けることができない。僕らは仕方なくUターンをする。僕の足はようやく震えだした。泰子の血は止まらない。僕らは行き先を市民病院に変えた。亀裂の入った路地をいくつもすり抜け、ようやく病院に着く。でも、本当の意味での辛い時間は、その時はじまった。

明かりのつかない病院の暗い待ち合い室はたくさんの人ばかり、そこで僕らは順番を待つ。次々と人が運ばれてくる。泣き声と叫び声が交錯する。『助けてやってください…』『誰か、血を止めて下さい…』『お願いします…』そんなパニック状態の中で、一人二人と亡くなっていかれる。

僕は泰子の腕などに巻いたタオルを時折緩めては、またきつく縛る。なんとか血を止めなくちゃいけない。お医者さんの姿は僅かしか見えない。そこに患者は長蛇の列。順番が来るまで何時間かかるか分からない。果たして、応急処置をしてもらった時はもう昼時だった。泰子の血は止まった。でも生死のやりとりをさんざん見せつけられた僕らの目は真っ赤に腫れていた。いったい、これからどうしよう、僕らはそんなふうによりやく途方に暮れることができた。

妻の実家に戻ると、無事におかあさんも助けられていた。みんなで近くの親戚の家に避難する。そこでおにぎりを食べさせてもらった。『家財道具を出さなあかなあ』そんなふうにおとうさんが言う。そこで僕らはもう一度、ぼぼぼ崩れてしまった妻の実家に戻る。形の残っているところから、出せる家財道具を取り出す。柱がきしむ度、背筋が凍る。

そんな作業が5日続いて、土曜日には終わった。その日の午後、家は急に揺れだして、やがて完全に崩れてしまったのだ。一階と二階とを繋いでいた一本の電線、それを切って20分後のことだった。

寒くて暗い病院の待合室で最後のため息をついて、亡くなっていった多くの人のことを思う。完全に崩れてしまった妻の実家の跡を見ながら、その中から生を掴みとった妻の家族の奇跡を思う。生と死が紙一重であること、今の僕にはよく分かる。生きているということ、心から感謝できる。そして君らが生きていることを、心から感謝している。

月曜日、君らの顔を見て、本当にホッとした。でも僕は随分と傷ついている部分もある。そのことについて書く。僕はこの地震のあとで、うまく笑えなくなっている。それは単にたくさんの人が亡くなっていくのを見たからなのか、それとも家と職とを同時に失った妻の実家のこれからを思うからか、それは分からない。でも、本当につらい。

水道とかガスとか電話とか、そんなのはどうでもいいねん。今はただただつらいねん。とにかく僕は随分と弱っている。いや、言い換えれば僕でさえ弱っている。

もちろんこの地震で、なんの痛みも感じなかった人がいても、別に僕に責める権利なんてない。でも、君らの周りには親を亡くした人がいる。兄弟を亡くした人がいる。おじさんを亡くした人もいるし、おばあちゃんを亡くした人もいる。家を失った人もいる。教科書とか制服とか、そんな自分の持ち物全てをなくした人がいる。家の人々が職を失って、生活の基盤を失った人もいる。

本当に色々な人がいる。だからせめてデリカシーを持ってください。君らの一人一人がどんなことを思うか、そんなのはもちろん個人の自由。でも何気なく言った一言でも、それが聞いている人をどれだけ傷つけることがあるか、それだけは覚えておいてください。人の心を平気で土足で踏みこむような、そんな人間にだけはなってほしくないねん。

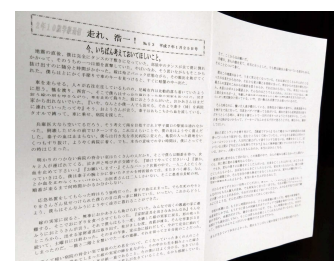
学校の再開には、もう少し時間がかかる。どうか有意義に使ってな。地域の体育館や水道局なんかは、家を失った人の避難所となっているけれど、もうすでに君らの同級生がボランティア活動を始めている。でも、まずは家の手伝い。水を運ぶ、それだけでも随分と役にたつはず。

そして、もしも時間が余ったら、自分の母校にでも顔を出してみい。そこにも君らの力を必要としてくれる人が必ずいる。君らだって、学校なんかよりよっぽどいい勉強ができるはずだから。

ともあれ、君らが生きていて本当によかった。こうして再び会えて、本当によかった。僕はもうしばらく家や妻の実家の片付けを続けます。お互いに人間的にひとまわり大きくなって、1週間後の次回の登校日、来週月曜にまた逢いましょう。

以上が僕の当時の学級通信です。阪神淡路大震災により僕のクラスの生徒のうち14人が家を失いました。でも、みんな生きていてくれました。妻の家族も生きていてくれました。そのことを心から喜んだ一方で、多くの方が亡くなられていくのも僕は目にしました。それがちょうど30年前の今日の出来事です。どうか今ひととき、亡くなられた方々のご冥福を皆でお祈りできたらと思います。

対面でなく、放送機器を用いた集会だったので、生徒の反応が私には解りません。でも、形式ばったものよりは伝わる何かはあったかなと勝手に推測したりしています。生きることを強く望みながらも叶わなかった方々がおられたということ、何の前触れもなく生命は奪われることがあるということ、それだけは僕は伝えたかったのです。



「ことばの力」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 新しい年に最初に生徒に伝えたこと

かつて、学級通信は自分の担任している子ども達のことを思い、書いていました。教育委員会に勤めている時に書いた課長通信などはともに働く仲間達のことを思い、書いていました。そして今、校長通信はともに東高の生徒を支えていただいている皆さんのことを思い、書いています。それ以上でもそれ以下でもありません。書きたいから書いている、伝えたいことがあるから書いている、ただそれだけです。

それでも最近は周囲の方から「生徒にも読んでもらったらいいのに」とのご意見をいただくことが増えました。とは言え、通信の中には生徒に伝える必要のないセンシティブな内容のものもあります。そこで「公に見せられるものなら公開しようかな」と思い、年明けに校務運営委員の先生方に相談したのです。「公開してもいいですか？」と。有り難いことに先生方からは概ね好意的なご意見をいただき、決心は固まりました。通信を書き始めて30数年、初めての決断です。生徒たちには全校集会の場で伝えました。

前回のオンラインでの話の時には僕の好きな花について話をしました。彼岸花、曼珠沙華とも言う花です。名前の通り、お彼岸になると前触れもなく花を咲かせ、そしてお彼岸が終わる頃には忽然と姿を消す、その姿を僕は「課された宿命にまっすぐに向き合うような花」と例えました。

その時が来れば、その日その場所で、ただ花を咲かせる、そういう花です。しかも花をひらく時、無防備にすべての葉を落とし、茎1本で空に向かい伸び上がる、そういう花です。

人も同じと言いました。今は近くにお父さんなりお母さんなり、見守ってくれている人、自分が困っているときに助けてくれる人がそばにいるかもしれません。でも、いつかは皆さんもこの彼岸花のように、自分1人で立たないといけないうですよ、と。そんな話をしていた僕に、その時が来てしまうのですから人生は不思議ですね。僕は僅か半年の間に、父と母を見送りました。でも、まっすぐに立っていなくちゃいけませんよね。両親から安心して見守ってもらえるように。

さて、ひとつ情報提供です。僕はかねてから先生方に校長通信を書いているのですが、みなさんの活躍を見て、思ったことなどを書いたバックナンバーについて、ホームページで公開しようかなと思っています。これは「いい生徒が集まっているから、東高は部活動でも探究活動でも成果をあげられる学校なんだ」という世間の評価について、「それだけじゃないぞ」と異議を唱えたいからです。

皆さんは努力しています。高めあおうとしています。進化しようとしています。当然、その過程で悩んだり苦しんだりもしています。そして東高の先生方はそんな皆さんをしっかり支えようとしてくれています。それらがうまく絡み合って今の東高があると僕は思っています。その実情を伝えたいとの思いから公開することにしました。皆さんも読んでくれたら嬉しいですね。

それではこれからも、お互いに努力し、高めあい、進化をめざしましょう、ということをお願いして、僕からの挨拶とさせていただきます。今日もご清聴、ありがとうございます。

過日、オープンハイスクール直前の大掃除、まだ見ぬ後輩達のために真摯に取り組む生徒達の姿を見て思いました。「彼らのさらなる成長に繋がるような言葉を口にできる、1人の大人でありたいな」と。

今週金曜はいよいよ阪神淡路大震災から30年という節目の日です。東高では中田さんが掲げてくれる半旗のもと、震災追悼行事を行います。主担当となる吉川恭子先生からは「校長先生、追悼メッセージをお願いしますね」と託されました。果たして私はどんな言葉を口にすべきか。残り5日、頭を悩ませたいと思っています。



「あれから29度目の1.17」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 令和6年1月1日の出来事

その日はかねてより朝から日本酒を飲んでいい日です。年に1度の1月1日。そう教えてくれた父と、もう再びその時間をともにすることができないのは残念ですが、幸い様々な方からお土産としていただいた日本酒が台所の倉庫に眠っています。その1本の栓を開け、おせちをつまみながら朝飯を終えました。

昼には妻のご両親たちと食事をともにしました。甥っ子と息子がいつの間にやら成人してしまいましたので、3人でお酒を飲みました。帰宅してから自分宛の年賀状を確認し、かつての教え子たちに返信用の年賀状を郵便ポストに投函しました。『あとは早めに夕食を済ませて仮眠をとり、日付が変わったら車を出せばいいかな…』そうぼんやりと考えていたら、ガタガタと音がしたあと、部屋が揺れ始めました。

時にして16時10分、石川県能登地方を震源とするマグニチュード7.6、最大震度7の地震。令和6年能登半島地震です。揺れが収まり、テレビから伝えられる被害状況を確認して、息が止まりそうになりました。そこに映っていたのが石川県珠洲市だったからです。珠洲市や能登町は阪神教育事務所時代の仲間の出身地、つまり御実家がそこにあると僕は知っていました。2人が帰省をしている可能性もあります。

連絡を取るか取らないか、しばらく逡巡しましたが、しないことにしました。たとえ心配しての行為であっても、自分に出来ることが何一つない以上、状況が知りたいというのは自分勝手な思いのように思えたからです。あとはただただ心配しながら、テレビを見ていました。

さて2日になりました。僕も帰省する時間です。とは言え、僕にはもう両親の住む家はありませんから、正しくは帰省でもないのかもしれませんが。距離にして600km。運転しながら一晩中ずっと、阪神淡路大震災のことを思い出していました。あの頃のことは去年の通信45号に書きました。家中の筆筒が倒れた我が家で、生かされた自分。全壊した家の中から辛うじて脱出できた妻のご両親たち。その記憶が蘇ります。加えて、その夜はその後の復興のことも思い出しました。当時の学級通信に僕はこう書いています。

○ 平成7年3月15日付け2年10組学級通信から抜粋してみる

3月9日、震災後はじめて僕は神戸に向かった。陸上競技部の顧問会議だったから、スーツじゃないといけな。だから僕は久しぶりにスーツを着て、黒のリーガルを履いた。そして阪急の武庫之荘駅へ歩く。15分くらいかな。久しぶりの革靴だから、早速足が痛くなる。そこから西宮北口行きの各駅停車に。車窓から見える景色は、武庫川の手前でがらりと変わる。屋根に敷かれた青いビニールシートが目立ちだす。

西宮北口で景色はさらに変わる。その辺りは僕がまだ大学生で、ボランティア活動をしていた頃の本拠地だ。週に三度ほど、この街で活動していた。よく飲み過ぎて、アスファルトに倒れこんだ記憶もある。その商店街はアーケードから完全に崩れている。なんとも言えない気分。しかし、それはほんの序章に過ぎなかった。そこから西へは阪急は動いてない。西宮北口から阪急今津駅へ、さらに阪神に乗り換える。

芦屋はまさに惨状と呼ぶにふさわしかった。ことごとく家が斜めに傾いている。自分の平衡感覚さえ失いそうだ。胸になんかがつかえてくる。でも、目をそらすことができない。電車は結構混んでいたけど、誰も一言も発しない。ある人は目を凝らし、またある人は呆然と、その変わり果てた芦屋を眺めていた。

阪神も御影駅から先は高架が崩れていた。そこから代替バスの乗り場へ歩く。かなり距離はあるのだが、その道のりを僕らは行進する。走る者もいない。崩れたマンションを前に立ち止まる者もいない。

やがてバス乗り場へ。乗るまで結構時間がかかる。電車の輸送力を痛感する。満員のバスを何本も見送り、ようやく乗りこんだバスは国道43号線を走る。バス専用レーンなのに、すすいとは進まない。1

0mほど進んでは止まる。たった3駅分、それが遠い。六甲の町並みも瓦礫があちこちに転がっている。

西灘駅から再び阪神で三宮へ。そこで僕はセンター街だけでも見てから行こうと思い、さんちかを抜けて、センター街への階段を昇る。あれっ、ここは何处だ？ それが第一印象だ。アーケードが完全に撤去され、ビルとビルの間から空が見えるセンター街はあまりに貧相だった。昔、よく飲んだ店なんかを見て廻る。もう跡形もない。歩けば歩くほど胸が苦しく、僕は再び向きを変えた。明石へ移動しようと思った。

そこからJRに。長田の鷹取商店街の横を通る。まさに焼け野原、何も残っていない。涙が勝手にこぼれてきた。昔、読んだ『はだしのゲン』は広島原爆をテーマにした漫画。その中でこんなシーンがあった。原爆が投下された際に家が崩れ、一階にいたゲンの父と姉弟が柱の下敷きになる。助かったゲンと母は助けだそうとするが、思うようにいかない。そこに火が迫り来る。父は母にゲンを連れて逃げるよう叫ぶ。泣き叫ぶ姉弟。それでも背を向け、その場を立ち去るしかない2人。やがて炎に包まれていく家族。

ここであの光景が繰り返されたのだ、と思う。自分の大切な家族、住み慣れた家に火が迫ってくる。それを見つめるしか出来なかった人達がいるのだ。学級日誌に坂本が書いていた。『松井先生は明るい。強い……』家が全壊し、親御さんをなくされ、それでも彼女は僕らという。本当に強い人だと思う。きっと心の中では色々な思いが交錯しているだろう。でも、それを僕らには微塵も感じさせない。この震災で辛い思いをされたすべての人のために僕は電車の中で手を合わせた。そうせずにはいられなかった。

須磨駅でおばあちゃんとその子どもらしき方が電車に乗ろうとした。でもおばあちゃんはおぼけが始まっているらしくて、ホームから電車への一步が踏み出せない。子どもらしき方がむきになって怒鳴り出す。『早くしい、早く。足をのっけるだけでええねんから』発車のベルが鳴る。でも、おばあちゃんはその一步が出ない。僕は駆け寄り、おばあちゃんを抱きかかえるようにして電車に乗せた。僕の背中でドアが閉まった。すると僕の横にいつのまにやら駆け寄ってきた人が二、三人いた。僕らは目を見合わせる。気になって、僕と同じようにおばあちゃんを助けようとしたのだろう。久しぶりに少しだけ嬉しくなった。

電車が明石駅に着く。そして会議場へ。どこから知ったのやら、多くの学校の先生が『奥さんの実家、たいへんやっとならしいな』そんなふうに声をかけてくれる。肩を叩いてくれる。大切に思ってもらっているなあ、そんなふうに思った。有り難かった。この人達と一生懸命に働いていて良かった、そう思った。

僕は尼崎に住んでいる。震災から2ヶ月が経ち、水が出る。ガスも出る。もちろん電気も今は通っている。畳も全部、換えてもらった。もうすべては終わったような勘違いもする。でも神戸では少しも終わっていなかった。いや、むしろ震災からの復興という物語が始まったところなのだ。会議が終わったあと、帰る頃にはもうすっかり日が暮れつつあった。僕は窓に映る自分の顔を眺めながら考える。単に呼吸をしているというだけでは、僕はやっぱり申し訳ないな。生かされた僕は必死に生きないといけない。

そう言えば昨日、生徒からこんな相談を受けた。『私、先生になろうと思っていただけで、最近悩んでるんです。新谷先生を見ていると、あまりに忙しそうで、私にはできないかなって……』

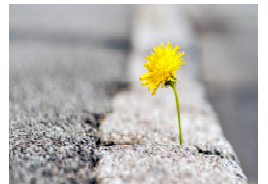
自分の生きる道は何通りもある気もする。でも、逆にどんなふうに生きたって、結局、僕は僕でしかない気もする。27歳になっても僕には解らないし、もしかしたらそれは一生解らないのかもしれない。

まあ、いいや。僕は僕の信じるままに生きよう。改めてそんなこと、考えた。そして、それは君らにしたって、同じことなのかもしれない。君は君の信じるままに生きればいい。きっとそうなんだよ。

○ そして今、思うこと

あの日から29年。教員になってくれた教え子が僕には何人かいますが、あの頃、教員になろうかと悩んでいた彼女は結局、教員になりませんでした。でも、保育士になりました。よかった、そう思いました。令和6年能登半島地震の影響を受けた仲間2人は、実家の被害こそ甚大だったものの、ご家族の誰1人として生命を失うことはなかったと教えてくれました。よかった、心からそう思いました。

生まれてきた意味、生かされている意味をあらためて見つめ直す僕の1月17日です。



「明けましておめでとうございます 新たな2024年の始まりです」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 再び、年賀状の話

昨年の通信にも書いたことですが、儀礼廃止の流れ、デジタル化の流れのなか、アナログ人間の僕は年賀状を出し続けています。年賀状は毎年、2種類つくります。ひとつは家族全員の名前でつくるもの。親戚や古くからの友達、学校関係の方などにはこちらを用います。もうひとつは自分の名前でつくるもの。こちらはかつての教え子から年賀状が届いたときの返信用で、あらかじめ年末につくっておくものです。

毎年どこか1日、何も予定のない休日が作成日です。昨年末は12月24日のクリスマスイブがその日でした。その時にふと気づいたことがあります。枚数が明らかに減っているのです。ほんの5年ほど前なら200枚は優に越えていたのですが、今年は家族全員の名前のものを終えた時点で120枚ほど。教え子からのものを加えても150枚ちょっとで終わりそうです。ざっと4分の3ほどになっていますね。

これが儀礼廃止、デジタル化だけが原因なら、それでいいのです。気になったのはいただいた喪中葉書の多さです。ご家族の誰かが亡くなられたというものが大半ですが、中にはご家族の方からの葉書も含まれていました。僕が年賀状を出し続けていたお相手が亡くなられたことを知らせてくれるものです。

そう言えば、ちょうど1年前の通信に書きましたね。『僕らは生きている限り、日々、様々な人に出会います。でも、「その人」に出会えるかどうかというのはほぼ偶然です。2022年も実に多くの人とお会いすることができました。そのなかに、今も連絡をくれる教え子の彼らと僕のように、ずっと繋がっていける出会いもあるのでしょうか。それは嬉しいことです。おそらく毎年の年賀状はこれまで実に多くの出会いを重ね、繋がりがりながら生きてきた自分の生涯をあらためて思い返すための証の1つなのですね』と。

今年は知りました。「その人との永遠の別れを年賀状で告げられることもあるんだな」と。もうその人との新しい思い出はこれっぽっちもつukれないのです。「仕事が忙しいことを理由に、会いたい人と会わないでいる場合じゃないな」そんなことを思いました。



○ 今年の正月に思ったこと

そうそう、今回も最後に少しだけ僕の話をしてください。ほんの10年ほど前までは一家で帰省して、母の作ったおせち料理をつまみながら、朝から父と杯を重ねるものだった正月。しかし、母が認知症となり施設に入居し、コロナ禍があり、感染した父も施設に入居せざるを得なくなり、ともに施設側から面会を制限されていたこともあって、昨年の正月は生まれて初めて父と母に会えないこととなりました。

でも今年は高校生になった娘が「昔みたいに車でジジとババに会いに行きたい」と言ってくれ、今春に大学院に進む予定の息子も「いいやん、それ」と同意してくれたので、久しぶりに一家で車で帰省することになりました。実に5年振りのこと。でも今なら2人とも受験はありませんし、考えてみれば2人は痩せ細ってしまった祖父母の姿を一度も見えていないのです。自分たちを可愛がってくれた元気だった祖父母も、こうして年を重ねて弱ってしまっている、その姿を見るのも大切なことかなと僕には思えました。

1月1日の真夜中、当日発熱して寝込んでしまった息子を残念ながら家に残し、僕らは3人で東に向かいました。かつては年末年始、黄金週間、お盆と年3回実施していた600kmドライブ。それは我が家の数少ない家族行事のひとつでした。とても懐かしい空気。そして僕らは、会いたかった人達と同じ時間を過ごしました。素敵な時間でした。その時、改めて思いました。「その人と会えるうちに遠慮なく会うべきだな」って。だから2024年、僕は食欲に人に会いに行きます。会えなくなってからでは遅すぎるからね。

「昨年はお世話になりました 本年もよろしく願ひいたします」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 今年の正月の過ごし方

ありきたりですが、毎年つくっていた家族写真入りの年賀状の代わりに11月中には喪中はがきを印刷し、お世話になっている方々に郵送しました。やがて、5月に父、10月に母を見送った私のことを気遣う直筆のはがきがいづつか届き、胸に滲みました。思えば、あたたかい方々に恵まれた人生です。そう言えば、昨年の通信で私は年々ふえゆく喪中はがきを悲しんでいました。当時、自分が出す側になるとは思っていなかったですね。その通信に絡めて震災に触れたものもありますので今回、あわせて付録にします。

さて、私にとっては物心ついて以来、初めて迎える喪中の年末年始です。年越しそばは長寿を願い、厄を落とす為に食べるものだから、「喪中であっても食べて構わない」と知ります。一方、お正月をお祝いするためのおせち料理は、「喪中の場合は控えるべき」と知ります。とりわけ紅白のお餅や祝いごとで食べるかまぼこなども「避けた方がよい」そうです。紅白を避け、白なますを口にすることにしました。

かくして私は実家をひとつ失いました。幸い、妻のご両親は近隣にお住まいで、しかもお元気なので昨年の正月は食事をともにさせていただきました。とは言え、600km離れた私の両親の住まいと違い、里帰り感はありません。基本的には自宅でひっそりと、のんびりとした正月を過ごすことになりました。考えるのはやはり生命のことでした。私は12月最後の全校集会で生徒に語りかけた話のことを思い返します。

区切りの全校集会にあたり、皆さんにまずはお礼を言いたいと思います。誰1人、生命を落とすことなく今日を迎えてくれてありがとう。とても嬉しいです。僕らが出会った最初の日にお願ひしましたね。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」と。お願ひを聞いてくれて、本当に嬉しいです。ありがとう。

さて、僕は皆さんと出会ってからの僅か9ヶ月の間に父と母を亡くしました。哀しいです。切ないです。でも、僕は今ここに生きています。そのことについて喜びがあります。父と母から授かった生命を護り、その思いを繋いで生きている、そんな小さな役割を成し遂げていることに喜びがあります。

子どもができるいちばんの親孝行は親の生命や思いを繋いで生きることです。そして今もここに、この胸に僕の両親は生きています。皆さんもきっとそうですね。これからどうか自分の生命と他人の生命を大切に作る人でいてください。先ずはお礼とお願ひです。

お礼を言いたいことがもうひとつあります。去る10月の百周年記念式典での皆さんの振るまいです。式典前日の予行練習で吉川恭子先生が仰いました。「『東高生は素敵だな、さすがだな』って思ってもらえる式典になったらいいなって思っています」と。だから僕もマイクを持たせてもらい、話をさせてもらいましたね。

「他校の周年行事を見ていて、『素敵だな』って思うのは、①起立と礼の姿勢が美しい生徒たち、②校歌を気持ちよく歌う生徒たち、③思いの詰まった言葉をスピーチする生徒会長に出会った時です」と。加えて、「それはそれで楽しみにしているんだけど、それだけでは皆さんの出番が少ないと思うので、出番を増やしますよ」と。



ひとつ 僕が挨拶をしたら、いつもの挨拶を返してください。

ふたつ 僕が訊ねたことに『そうだな』と思ったのなら、いつもの返事を返してください。

生徒会長の安積くんのスピーチ、とても素敵でした。皆さんの起立と礼はもちろん、校歌も国歌も最高に素敵でした。加えて来賓の方々が口にされたのが、皆さんのいつもの挨拶といつもの返事の素晴らしさです。「だいふ練習されたんですか？」と聞かれたので、答えました。「いや、いつものことですよ」と。少し話を盛ってしまいましたか？ そうでもないですよ。

ともあれ、皆さんが人前で輝くこと、素敵だなんて思われることが僕ら教職員は大好きです。同窓会の方々も皆さんの姿勢の素晴らしさを自分のことのように誇らしげに語っておられました。良い式典をともにできて嬉しいです。本当にありがとうございました。

さて、冬休みです。今年は例年より長く10日以上あります。その日々をどのように使うべきか。僕から2つだけお願いをします。ひとつは命を大切にすることです。つらいこともあるかもしれませんが、でも、つらいときは「つらい」って言うといいですよ。自分の気持ちをわかってくれる人に「つらい」って言えば、それだけで気持ちが少し楽になることもあるって、僕は知っています。

そんな弱っている自分に寄り添い、付き合ってくれる人が周りに何人いるかって、結構大切なことだと僕は思っています。それとは反対に、隣で悩んでいる友達がいたら、そっと寄り添って話を聴いてあげられる人でいてくれたら嬉しいです。

僕は不完全な大人かもしれないけれど、大人として生きることを心から楽しんでいます。皆さんにも是非、日々を楽しめる大人になれるよう、生き抜いてほしいです。よろしくお願いしますね。

ふたつめ。先ほど自分が両親を亡くした話をしましたが、それ以来、僕は可能な限り人と出会おうとしています。会えなくなってから「会いたい」と願ってもそれは叶いませんからね。

おじいちゃん、おばあちゃん、親戚の方々など年末年始は普段会えない方と出会える絶好の機会です。また、遠方に住んでいる友達とも時間をつくって会えるかもしれません。どれだけ多くの人と世界を共有できているかというのはひとつの財産です。ぜひ、豊かで素敵な時間を過ごしてください。

先日、本校キャンパスカウンセラーの中村経子さんと話をしている時に言われたんです。「うちの子は入学してくる前から『できる子』と周囲に思われている子たちだから、『しんどい』とか『つらい』とか口にするのが苦手なんですよ」と。ちなみに、中村経子さんはいつも東高生のことを『うちの子』と呼んでくれます。私が彼女を信頼し、大切にしているのはそういうところにも理由があります。

その時に思ったんですよ。「次に生徒に話すときは、つらいときにSOSが出せる『援助希求的態度』の大切さについて話をしよう」と。僕の後にはマイクをもたれた松下先生も生徒指導部長として、話をしてくれました。「生命を大切にしたい。そして困った時は周囲の人に『困っている』と伝えて欲しいし、友達から『困っている』と伝えられたら、その話をしっかりと聴いてあげられる人でいて欲しい」と。

集会の後、吉田教頭先生が校長室に来てくれました。「すごい光景でしたね。全校生徒がまっすぐに壇上を見上げて、話をしっかりと聴いているんですよ。しかも長期休業の前の集会と言えば『勉強せえよ』とか『わるいこと、すんなよ』が普通ですよ。でも、うちは校長先生も生徒指導部長もそろって生命の話しかないし、それを生徒がきちんと受け止めていましたからね。あんな光景、見たことがないですよ…」

過日の百周年記念式典での同窓会長挨拶、大庫会長は生徒に語りかけました。「この度の百周年式典、仕切らせてもらった僕は28回生です。じゃあ、50年後の百五十周年式典を取り仕切ってくれるのは78回生、ちょうど今の2年生ということになるのか。まあ、この中の誰かやな。頼んまっせ」会場の空気がぎゅっと引き締まった瞬間、さらなる進化は始まっていたのかもしれない。





「78 回生との時間」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 前日の結団式から兆しはありました

清流会の先輩方の思いが詰まった清流百周年記念館の大ホール、結団式の最初にマイクを持たせていただいた私は修学旅行の葉の冒頭に寄せた原稿の話に触れることから始めました。葉の冒頭、こんな話です。

海の色は水深が深いほど濃い青色に見えるので、遠浅の沖縄の海の近場は「エメラルドブルー」で、遠方は「コバルトブルー」です。海はひとつの色では語れないのです。見る場所や角度、その日の天候により違う顔を見せる海。それは私達と同じかもしれません。

皆さんは沖縄に向かいます。いつもと違う場所で友達と行動をとると、普段は見られない一面が見えます。お互いをより深く知ることや、団体生活の中で連帯意識を養うこともできます。

『海はひとつの色ですか？』そして『隣にいる友達はどうですか？』
ひとつの言葉では括れない問いの答えを見つける。修学旅行はそのような学びをする機会でもあります。
早く送り出してくださった家族への感謝を忘れず、責任ある態度と行動をとることで、思い出と学びの多い修学旅行となることを心から期待しています。

「高校時代のいちばんの思い出として、修学旅行をあげる人はたくさんいます。だから当然、楽しい旅行にすることは最低限、大切なことです。加えて、僕は葉の冒頭に書きましたよね。皆さんにとって新たな発見のある旅行にしてもらえれば嬉しいな、心からそう思っています。よろしくお願いしますね」と。

満本先生からの健康を気遣う話や、入念な事前準備をしてくださった岩本先生や上田先生らからの旅行全般にかかる注意事項に顔をあげて聴き入る生徒。最後に原田先生が「ルールを守って？」と問いかけると、生徒は一斉に答えます。「アホになる！」と。その瞬間から素敵な修学旅行になる兆しはありましたね。

集合時間5分前になると、みな小走りで集まってくれます。お世話になった宿泊施設の支配人の方がたいそう驚かれて「先生方は『早くせえ』って声をあげないんですね」と訊ねてくれました。私は「うちの先生方は日頃から『大丈夫か？』と生徒に自覚を促してくれていますし、生徒はその声に反応してくれています。声を荒げることはそんなにないですね」と答えました。ちょっと誇らしい瞬間ではありました。



4日間を通じて空は青かったものの海は荒れ気味で、実施できないプログラムもありました。そういった制限の中でも78回生はさんざんハジケてくれました。特に海に入れないうちに代替として用意していただいた寒空のプールの時間のハジケ方は良かったですね。

学年団の先生方はその姿をあたたく見守っておられました。大きな怪我人も病人もなく、満本先生からは「養護教諭にとってこんなに平穏な修学旅行はないですよ」と教えていただきました。ちなみに帰りの航空機の操縦士は東高44回生。素敵な偶然ですね。いい時間を共有させてもらい、ただただ感謝です。

○ そうそう、たいした話ではないのですが…

2日目、石垣やいま村にて河野先生、岩本先生とともに私は民謡ライブを見ていました。最初の曲は三線と太鼓、そこに指笛が加わった華やかな曲でした。そこから一転、2曲目はBEGINがつくり、夏川りみが歌ったヒット曲『涙そうそう』。みな、石垣島の出身ですね。

ゆるやかな前奏に、この1年で経験したいくつかの別れを思い出した私は目が潤んでしまい、そこで退席することにしました。これも忘れられない思い出のひとつです。



「陰日向なく」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 今月3日は…

篠山に車を走らせました。駅伝の県大会です。以前お伝えしましたが、かつて私は自他共に認める『陸上の先生』でしたので、この大会は1つの区切りでした。この大会が終われば3月から9ヶ月に及んだシーズンが終わるのです。直後は1週間ほどオフにして、生徒とともにリフレッシュをはかったものです。

それでも学校現場を離れてから、私は陸上競技の試合には顔を出さないようになりました。陸上関係の方々から「未練たらしい奴だ」と思われるのは嫌でしたし、成果をあげる生徒や先生方に嫉妬してしまう自分はもっと嫌だったのです。幸い我が家の息子と娘が陸上競技部に入部したこともあり、2人の試合だけは保護者として見に行ったものの、それ以外の試合には極力、顔を出さないように心がけていました。

というわけで、篠山の県大会には20数年ぶりに訪れることとなりました。久しぶりにお会いした陸上関係の先生方からは「校長としての応援ですか。正直に言って、全然似合ってないですね」とさんざん冷やかされました。まあ、ジャージ姿でもなかったですしね。でも、それさえ嬉しく感じる久々の篠山路。

河野先生は言うておられました。「昨年5位だった女子チームが順位をあげることができたら…」と。下馬評では3位か4位。表彰台に上がれるかどうかはやはり違いがあります。果たして結果は3位。初の表彰台です。叶いましたね。



加えて、西岡先生からは「男子チームが去年よりぐっと順位をあげてくれたのも嬉しかったですね」との言葉をお聞きします。とてもあたたかい目線です。部員の努力はもちろん、原田先生、植木先生を含めて顧問の先生方の丁寧な指導とが合わさった成果。いい秋の日でした。

○ 嬉しい知らせは続々と…

そう言えば、過日の始業式では水泳部が近畿大会出場を含め、表彰伝達式のステージを独占してくれました。母のことがあり、演奏会に見に行けなかったことを川本先生にお詫びしますと、「あのステージで経験した御蔭もあって、後日の演奏会では賞をいただくことができましたよ」とのこと。嬉しいですね。

八木先生からは県新人大会における女子団体の部での3位の表彰状を見せていただきます。先生は東高の出身ですもんね。私も長い間、母校で陸上競技を指導させていただいたので、自分の後輩でもある教え子の活躍がいかに嬉しいものか、身をもって知っています。おめでとうございます。ちなみに岸本先生も表彰式の際に「泣いてしまいました」とのこと。心に沁みる話です。



企業を志す学生によるビジネスプランのプレゼンテーション大会『スタートアップチャレンジ甲子園』では、2年生の2人が参加280チーム中で2位入賞を果たしたと、新先生と谷口先生からお聞きします。東高にとっては昨年度1位をいただいていますから、2年連続となる受賞。これはSTEAM特別講座による成果です。

部活動であれ、探究活動であれ、自分を輝かせる場所を生徒自らが選び、そこで花を開かせるという経験は、得がたいものだと思います。ご指導、ご引率していただいている先生方、いつも有り難うございます。

○ とは言え、先生方には日々、多くの負担をおかけしていますね

こうして華々しい成果をあげられる活動があれば、なかなか日の目を見ないものもあります。その筆頭となるのは現在、3年生の数人を対象とした遠隔授業でしょうか。それでも、担任の先生をはじめとして第3学年の先生方には生徒たちをしっかりと支えていただき、ありがとうございます。

見えやすいところだけでなく、見えにくいところも先生方にはご尽力をいただき、感謝しています。

「オープンハイスクールありがとうございました」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 思い返せば8月5日は…

8月5日は加古川市民会館での学校説明会でした。優に1000人を超える方に集まっていただき、中学生と保護者の方に東高の魅力をお伝えした1日。それでも学校説明会は単なる人気投票に過ぎないという評価もあります。受験勉強も進路指導も本格化する前の段階です。どこか物見遊山的な要素もあるでしょう。しかし、東高の先生方も生徒会のメンバーも本気で相對してくれ、非常に濃密な時間となりました。

その御蔭もあってか、直後の9月1日付け進学希望者数等調査では普通科で374人、理数科で98人と前年度調査より希望者は増えていました。嬉しかったですね。しかし今や11月。単なる憧れではなく、入学への本気度がより高まっている生徒だけが集まってくれるでしょう。かくして当日は開始1時間も前から続々と中学生や保護者の方が集まってくれました。冒頭の校長挨拶はきわめて簡潔にしました。

こんにちは。本日は兵庫県立加古川東高等学校のオープンハイスクールにお集まりいただき、誠に有り難うございます。ありのままの東高を見ていただけること、本当に嬉しく思っています。

東高を支えている校訓のひとつは向かって右側に掲げている「自治創造」です。日頃の学習や部活動、体育祭や文化部発表会等の学校行事、生徒会活動といったものが、この学校では生徒たちを中心として行われています。なぜか。本校のテーマが「正解のない未来を切り拓く人材の育成」だからです。

今や時代は光の速さで変化、進化しています。この先がどうなるのか誰にも解りません。マニュアルに頼って生きられる時代ではないのです。そこで必要となるのは意志の力です。「こんな自分になりたい」という意志の力です。1人1人が頭の中に描く「理想とする自分」、「在りたい自分」に近づくために様々なことに打ち込むことによって、そのヒントを見つけてもらえたら…、いつもそう思っています。

また、本校のもうひとつの校訓は左側に掲げている「明朗親和」です。「理想とする社会」いわゆる「在りたい未来」を実現しようとする時、自分一人の力では限界があります。そのような時、周囲の仲間を巻き込みながら立ち向かうとき、必要となるものは何か。人間的魅力です。「この人とともにありたい」と思わせる安心感、信頼感です。魅力ある人に成長してもらえたら…、いつもそう思っています。

さて、私の話はこのへんにしておきましょう。今日のオープンハイスクール、「お手伝いをしてくれませんか」と呼びかけたところ、実に160人を超える生徒が「手伝いたい」と手を上げてくれました。彼らには皆さんに伝えたい言葉、伝えたい思いがきつと山ほどあるのです。だから、ここから先を僕は彼らに預けたいと思います。皆さんの先輩方がどれほどこの学校を愛しているのか、そして、どれほど魅力的なのかを感じ取ってくれればと思います。そんなお願いをもって私からの挨拶とさせていただきます。

800名を超える方が集まってくれた2日間。ステージ上からの様々なプレゼンテーションや発表も良いものでしたが、やはり今回の肝は最後の時間に組み込まれていた、各教室に分かれての中学生と東高生とのグループ懇談。私は教室を回りながら、その声に耳を澄ませました。

「私はとてもじゃないけれど東高に入学できる成績ではなかったんです。でも去年、このオープンハイに参加して、『絶対に東高生になりたい』と思い、それから必死に勉強しました。今は本当に楽しい毎日で、だから思うんです。『あのとき真剣に頑張ってた良かった』って」

伝えたい言葉、伝えたい思いは、中学生の胸にきつと届いていますよね。



「病めるときも 健やかなるときも 彼女が愛してくれたから 僕は自分自身のことを少しでも好きになれたのです」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 教員の頃、僕はこんなことを学級通信に書いていました

『母から電話があった。花を贈ったので、そのお礼の電話だった。「もう、いいのに」って母は言うけれど、おかあちゃんは一生おかあちゃんだもんね。「もういい」わけない。

離れて暮らすようになって、もう 16 年になる。まもなく一緒に暮らした歳月を、離れて暮らした歳月が越えていくのだろう。僕の人格形成に少なからぬ影響を与えた母。年間に休みが 10 日ほどしかとれない、こんな働き方をしているので、会えるのは正月くらい。それは淋しいことのような気もするけれど、「つまらない、つまらないって言いながら、働いているよりはいい」と母は言う。確かにその通りなのだろう。

まだ上手に母のことは語れない。うまい感謝の言葉も見つからない。いつまでも忘れられないのは中学生の頃のこと。よく問題を起こしては、学校に母と呼び出されたっけ。自転車に乗れない母を後ろの荷台につけて、僕は学校までペダルを漕いだ。母はそういうときまって、何も言わなかった。じっと黙ったままだった。あれがいちばん辛かったね。あれがいちばん辛かった。償うこともできないまま、時は過ぎゆく』

○ 昨日は母の日でした

指導主事となる前年の母の日に書いた学級通信。親孝行なんて何ひとつ出来ていない自分を戒めるような文章です。結局、ともに暮らしたのは 19 年。20 歳になる年に離れて暮らすようになり、それから毎年カーネーションを送っていました。でも、もう 7 年ほど前に花の世話どころか自分自身の世話さえできなくなったので、送るのを止めました。それでも当時は父が元気なこともあり、1 年間は老老介護をしてくれていました。

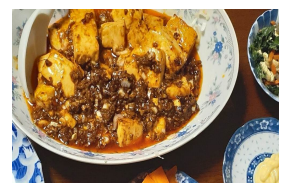
父はおかずこそスーパーの惣菜を買っていたものの、米を炊き、味噌汁をつくり、食器も洗ってくれていました。洗濯機を回し、拭き掃除をし、母の下世話もしてくれていました。だから月に何度か帰省する僕が母にできることと言えば、おかずのストックをつくり、冷蔵庫や冷凍庫に並べることや、風呂につからせてあげることでした。かつて母がつくってくれたように麻婆豆腐の豆腐を絹ごしにすると、とても喜んでくれました。

しかし、母の認知症の進行は早かったですね。あっという間に、その世話は父の手には負えなくなりました。そこで施設を回り、父が自転車で会いに行けるよう家から近い施設を選び、預かっていただくことになりました。やがて父も認知症になります。数年前まで父の日には好物の魚の干物を送っていたのですが、さすがに自分で魚を焼くことも出来なくなってしまったので、それも止めました。僕は父の日も母の日も失ったのです。

ふと思います。早くにご両親を亡くされた方は切ない父の日と切ない母の日を過ごしてこられたのでしょうか。幸か不幸か、この歳になってようやく親孝行のようなことができた気がする僕も、遠かれ早かれ両親そのものと別れる日が来るのでしょうか。年齢を重ねるということはこうして 1 つ 1 つ失っていくことなのですね。

児童虐待や育児放棄のニュースに触れる度に胸が締め付けられるのは、その 1 つ 1 つの事例に何も関与できない自身の無力さを思い知らされるとともに、欠点だらけの不肖の息子にただ寄り添ってくれた母のかつての姿を思い出すからですね。

生まれ落ちる環境を人は選べません。だからこそ今いる場所で必死に伸びようとする生徒が大切にされる学校づくりを精いっぱい手伝いたいな、改めてそう思う母の日です。



「百周年記念式典のあとの話」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 10月26日、その日は以前から…

「加古川東高校の百周年はとても重たいけれど、あんたなら何とかするやろ。頼みますよ」。藤原教育長にそう告げられた3月から、ずっとこの日のことを気にかけていました。何度も失敗する夢を見ました。壇上の隣の席で教育長はしかめっ面をしています。そんな夢です。だから27日を心の支えにしながら過ごしていました。川本先生が箏曲部のステージのチケットをわけてくれたのです。無事に式典をやり遂げ、翌日は心穏やかに琴の音に耳を澄ます、そんな自分を想像していました。しかし、現実には甘くありません。

9月に入ると、認知症で施設にお世話になっている母の体調が一気に悪化し、半ばには医師から「もったとして、ひと月」と伝えられました。急ぎ埼玉県にある母の施設に向かいました。食事がとれなくなっているようで栄養剤を点滴で補給するようになっていました。ご飯をつくるのも食べるのも大好きな母ですが、両方できなくなってしまったのです。それはあまりに辛い現実でした。

その後、何度か母を訪ねるために夜行バスで往復しました。母はやがて声も発せなくなってしまいました。それでも僕の顔を見ると足を動かして僕を蹴ろうとします。何か伝えたいことがあるのでしょうか。何度も何度も蹴られましたが、母が僕に何を伝えたいのかは解らず仕舞いでした。

10月23日、「今週末まではもたないかもしれない」そう医師から告げられました。さすがに私も人の子なので気持ちはぐらぐらと揺れ動きました。埼玉に飛んでいき、母に会いたい気持ちがありました。でも、26日は200人近い来賓の方を迎える大切な式典の日です。そこに穴を空けることは一校長としては許されません。だから毎朝、私は祈るようになりました。あと4日、あと3日、あと2日、あと1日…。

26日の朝も祈りました。「式典と祝賀会が終わったら、すぐに新幹線に乗るので、もうちょっとだけお願いします」と。果たして母は頑張ってくれました。施設に着いたのは22時を回ってからでしたが、目こそ閉じていたものの母は呼吸をしていました。高校生になる私の娘が一緒でした。彼女は修学旅行から帰ってきた翌日だったのですが、「バスに会えるなら会いたい」と言って付いてきてくれたのです。

母の頬に触れて「ありがとう」と私は伝えました。母は一瞬まぶたを開きましたが、すぐに閉じてしまいました。足を動かしてもくれませんでした。施設の方のご厚意で私と娘はそのまま母の近くで横になりました。明け方、再び母の頬に触れました。まだぬくもりはあります。少し安堵した私と娘は5月に息を引き取った父のお墓にお花をあげに行きました。「もう少しでも…」と父にお願いしました。

月曜の朝は保護者の方から、お話を聴く約束がありました。そのため日曜の遅い時間に帰宅し、月曜は朝から学校に。1時間ほどお話を聴きし、笑顔で学校を出られる保護者の方を見送った直後、電話が鳴ります。母が息を引き取ったという知らせでした。母は保護者との約束も守らせたかったのです。再び私は埼玉に向かうこととなりました。



母が認知症と診断されてから、もう9年が経過します。その間、遠距離介護を続けてきましたから、いつかはこんな日が来ると頭では解っていました。それでも現実にはその日が来ると、受け入れるのは難しいですね。去年の通信で、母について書いたものがありますので今回はそれを付けさせていただきます。

「おにいちゃんは浩ちゃんの埼玉出張を待っていたし、多加子さんは浩ちゃんの仕事の目処がつくのを待っていたんだもん…」父の弟にあたる叔父から告別式の席でそう声を掛けられます。「不肖の息子なんで、僕のこと心配で仕方がなかったんですよ」私はそう返しました。東高に赴任させていただいたこと、両親を見送ったこと。やたらと『運命』という言葉の重みを感じてしまうこの1年ではあります。

「百周年記念式典ありがとうございました」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 10月26日、その日は朝から…

「神戸新聞、見ましたよ。さすが、加古川東ですね」親しい方からそう伝えられます。朝刊に見開き一面の巨大広告。このデザイン原案をつくってくれたのは阿野先生。抜群のセンスです。清流会会長の喜ぶ顔が思い浮かびます。同窓会を中心とする実行委員会の方々の思いが目一杯詰まった加古川東高等学校の創立百周年記念式典。準備は整いました。

前日の僅か1時間足らずの予行練習。吉川恭子先生がマイクをもたれました。「私は『東高生は素敵だな、さすがだな』って思ってもらえる式典になったらいいなと思っています」。そのあと簡単に礼の練習をしたあと、ひと通り全体の流れを全員で通しました。



私もマイクを持たせてもらいました。「他校の周年行事を見ていて、『素敵だな』って思うのは、起立と礼の姿勢が美しい生徒たち、校歌を気持ちよく歌う生徒たち、思いの詰まった言葉をスピーチする生徒会長に出会った時です。でも、それだけでは皆さんの出番が少ないですね。僕は来賓や同窓会の方々に、皆さんの声を聴かせたいと思っています。僕が挨拶をしたら、いつもの挨拶を返してください。僕が訊ねたことに『そうだな』と思ったのなら、いつもの返事を返してください」それだけを伝えました。

吉田教頭先生からの開式の言葉のあと、私の出番です。第一声「おはようございます」と挨拶しました。生徒たちは「おはようございます」と返してくれました。いつもの挨拶です。4月の始業式、はじめての校長職に緊張する私を、力強く励ましてくれたあのいつもの挨拶です。安心して私は式辞を開きました。

絶ゆることなく流るる加古の清流のように、豊かに幾年月を重ね、ここに兵庫県立加古川東高等学校が創立百周年という大きな節目を迎えることとなりましたことはこの上ない喜びであります。これもひとえに本日、ご臨席いただきました兵庫県副知事 服部洋平様、歴代の校長先生をはじめとする多くのご来賓、同窓会、PTA、後援会、地域の皆様、並びに兵庫県教育委員会など、関係各位のご尽力とご支援の賜物であると深く感謝申し上げます。

本校は大正13年、当時の加古郡・印南郡の方々の強い願いとご尽力により、旧制 加古川中学校として創設されました。その後、昭和23年の学制改革により加古川東高等学校となりました。以来、地域からの期待と信頼、ご支援に支えられながら発展を遂げ、本校から飛び立って行かれた卒業生が国内外のあらゆる分野において、かけがえのない人材として活躍しておられることは実に頼もしい限りです。

本校の教育方針の根幹は旧制加古川中学校以来、大切に引き継いできた校訓「自治創造」です。この精神は日頃の学習や部活動、体育祭や文化部発表会等の学校行事、生徒会活動において、今なお如何なく発揮されています。この先、1人1人が頭の中に描く「理想とする自分」、いわゆる「在りたい自分」に近づこうとする際、本校で身につけた「自治創造」の精神が必ずや支えになるものと確信しています。

また、もうひとつの校訓「明朗親和」は、「理想とする社会」、いわゆる「在りたい未来」を実現するために必要となるものです。あらたな何かを成し遂げようとする際、自分一人の力では限界があります。そのような時、周囲の仲間を巻き込みながら立ち向かう際に必要となるものは何か。人間的魅力です。「この人とともにありたい」と思わせる安心感、信頼感、それらを身につけることこそが「明朗親和」が求める精神です。人間的魅力こそが「在りたい未来」を築く礎となるのです。

ひとたび世界に目を向けるとグローバル化、技術革新の進展など、時代は激しく変化しています。また、多発する自然災害や地球温暖化、国際情勢の不安定化についても日々、報道がなされるなど、現代社会は解決しなければならない様々な課題に直面しています。

そこで本校では現在、教育ビジョンを『正解のない未来を切り拓く人材の育成』として掲げています。変化の激しい時代を生きるこれからの世代には想定外の事象とまっすぐに向き合い対応する力や、模範解答のない、正解の解らない不透明な未来を自らの手で切り拓いていく力を身に付けることが不可欠であると思われるからです。

このたび、本校同窓会である清流会から、記念事業の一環として学校の隣接地に「清流百周年記念館」を寄贈いただきました。ここから、また新たな百年が始まるのだと思うと感謝の念とともに身震いのする思いであります。先輩方の熱い期待を胸に、大切にに使わせていただきます。誠に有り難うございました。

さて、校歌に『光は常に東より』という一節があります。生徒一人一人にとりまして、本校が永遠に、「理想の自分」「理想の社会」「理想の未来」を築くために学ぶ場で在り続けることで、皆様方に信頼され愛される学校として、これまでと同様にこれからも光を放ち続けますよう、生徒・職員一同、精進をしていく所存でございます。生徒の皆さん、先輩方の思いを繋いでいってくださいませ。

今後とも、皆様方の変わらぬご指導とご支援をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、創立百周年記念事業の実施にあたりましては、同窓会やPTA、後援会が中心となって記念事業実行委員会を組織され、様々な事業を計画するとともに、着実に準備を進めてこられました。そのご尽力に対しまして、心から感謝申し上げますとともに、今後ますますのご支援を賜りますようお願いいたしまして式辞といたします。

令和6年10月26日 兵庫県立加古川東高等学校長 新谷 浩一

式辞の中途、私からの呼びかけに生徒は力強く「はい」と答えてくれました。いつもの返事です。最初の挨拶、中途の返事、それは予想どおりのものでした。それでも読み終えたあと、会場に沸き起こった拍手の渦は想定外でした。あとで吉田教頭先生から言われました。「校長式辞のあとの拍手なんて見たことがないですね」と。確かに来賓祝辞ならまだしも、校長式辞のあとの拍手は私の記憶にはないですね。



その後も、壇上に立たれたすべての方へのご挨拶のお返し、お礼としての拍手も素晴らしいものでした。校歌も会場中によく響き渡りました。生徒会長の安積くんの「東高をよりよいものとするために生徒一同、これからも東高生であるという誇りを胸にがんばります」というスピーチも実に見事でした。生徒たちが『素敵に』輝いた式典。

だからこそ清流会の会長挨拶では「引き継いでもらうのは嬉しいけど、もっともっと進化していいぞ」とあたたかく言っていただきました。記念講演をいただいたNHKアナウンサーの高瀬耕造さんからは、自身の東高時代を振り返ったうえで、「できない自分にモヤモヤし続けた高校時代があるから今がある。大いにモヤモヤしたらいい」とあたたかく励ましてもらいました。実にいい時間でした。

○ 式典のあとで…

式典終了後、生徒は学校に戻り、生徒会主催の百周年記念イベントへ、私は東高出身の先生方や上村事務長とともに百周年記念祝賀会へ。会場で清流会会長から話しかけられます。「長いことかけて、今まで準備してきたけど、ほんまにいい百周年になったな。校長さん、有り難うな」

握手を求められたとき、目頭が熱くなりました。でも、こんなにいい1日になったのは、先生方と事務室の皆さん、そして生徒の御蔭です。だから私から「有り難うございました」。



「いよいよ今週末は百周年記念式典です」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 嬉しいことは続々と…

ある日、内橋先生が校長室に來られて写真を見せてくださいました。加古川市志方にある円照寺での数枚のショット。そこには色とりどりの彼岸花が写っていました。「先日、行ってきたんですけど、校長先生はこういうのが見たいかなと思ったので…」と言われます。

正直に言って衝撃でした。彼岸花ファンを名乗りながら、私は赤いものしか見たことがなかったのです。「今年はもう盛りを過ぎたので、見に行かれるなら来年ですね」と教えてくれました。実に7種類、1500株の彼岸花が咲くそうです。裸足のまま、体育館でバスケットボールの指導をしておられる内橋先生の、ちょっと意外な一面とあわせて、あたたかい気持ちになりましたね。

その日の放課後、自転車置き場の脇を通り過ぎる際には、自転車で下校しようとしている男子生徒と目が合います。頭には黒いヘルメット。「嬉しいな」とつい声を掛けてしまいました。すると「買ってもらいました」との返事。松下先生も「ヘルメットを被っている子、少し増えた気がしますね」と言われます。

富田先生からは「ヘルメットについて探究のテーマに取り上げている生徒もいますよ」と教えてもらいました。私は根が単純なので、1人でも2人でもヘルメットを被ってくれる生徒が増えてくれたら、それで嬉しいのです。見た目よりも自分の生命の大切さについて重く考える生徒が増えた証ですからね。

多くの生徒は高校を卒業すると同時に、生き方について教わる機会はぐっと減るように私は思っていました。だから教員であった頃は授業で、部活動指導の場面で、学級通信の紙面で、生徒にメッセージを送り続けていました。彼らのロールモデルとなれるような生き方ができれば良かったのですが、そんなふうには生きられない以上、それくらいのことはしないと自分の存在は無意味のように思っていたのです。

だから授業や部活動を見に行く感覚で、先生方が書いておられる学校通信や学年通信、進路通信は決裁段階からじっくり読みます。いいなと思ったらラインを引き、感想まで書いてしまう時があります。多分、羨ましいのだと思います。生徒に思いの丈を語ることでできる先生方がたまたま羨ましいのです。そして同時に、それを真っ向から受け止めることでできる生徒も羨ましいですね。いつも有り難うございます。

ただ実際は、人は大人になっても成長できますね。先週の面談の中で、ある先生から聞かれました。「教育委員会で働いて良かったですか」って。だから答えました。「言いたい放題、やりたい放題であった自分からは少し成長できたことと、凄い人にたくさん出会えたことは良かったかな」と。

ちなみに前校長の志摩先生も、20年前にともに働かせていただいた先輩です。過日、「渡したいものがあるねんけど…」と言っていただきました。封を開けると、入っていたのは東高の百周年リカちゃんでした。いわゆる芋ジャージが着替え用として付いています。素敵です。

気づけば今週末はいよいよ百周年記念式典ですね。東高どころか加古川の街にさえ、縁もゆかりもない私を清流会の先輩方はあたたかく受け入れてくださいました。

それが嬉しくて、先輩方のお荷物にならないよう、必死に駆け抜けてきた半年あまりの日々。いよいよ恩返しの時です。『光はつねに東より』先輩方と先生方と生徒とともに、「いざ歌わん」そんな気分です。



「モンタニャールの詩を聴きながら」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 珍しく結果が気になることもあるのです

部活動等で外の世界に触れると、経済的な面において県立高校を取り巻く環境がさほど恵まれてはいないことを痛感します。グラウンド、体育館、備品等、見劣りすることばかりです。でも、県立学校は県立の施設として、兵庫県から与えられた予算の中で学校運営をしていかねばなりません。まあ、どうしようもないよな、教員の頃はそんな諦めの境地もありました。

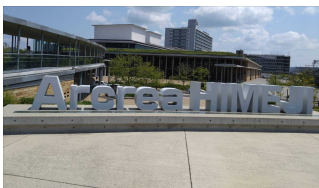
その考えが一転したのは県教委で働くようになった36歳の時です。学校の予算は県税等による県全体の収入「歳入」を、様々な使い方として分け合う「歳出」の一部であるということを知ったのです。要は「県教委の職員が頑張れば、より多くを学校に分けてもらえるかもしれない」と知ったわけです。

当時の私は高校教育改革の担当でしたから、仕事を進めようとするなら「歳出」を多くわけてもらうしか方法はありません。「発展的統合校には1学年が収容できる講義棟を…」「総合学科の学校にも講義棟を…」「同一敷地内に2校が同居する場合は、どちらかが引け目を感じないようにそれぞれの校舎を…」

様々な要望をいただき、それを実現するために「歳出」を多くいただくことは30代の頃の私の最も大きな仕事でした。ラフな設計図を描き、電卓を叩いては予算書をつくり、お願いにまわりました。とは言え、所詮は体育会系国語教員だった私ですから、最初からそんなことが器用にできるわけではありません。行政職員の方に仕事を教わりながら、苦しみながらです。その頃、仕事を教えてくださった職員の中のお1人が上村事務長です。それにしても、もう20年も前の話ですか。ずっとお世話になりっぱなしですね。

そういうことですから民間の方に「金銭面でお手伝いしましょうか」と言われるとただただ感謝でした。昨年度は伊藤文化財団さんから新たなお話をいただきました。それまで県の総合文化祭に協賛していただいていたが、「高校の部活動に直接的な支援ができれば…」という話をいただくことができたのです。

令和5年度は県立4校の吹奏楽部に楽器を寄贈していただくこととなりました。大会での実績や地域社会への貢献を踏まえ、私達が選んだのは北須磨、西宮、小野、そして東高。県庁内で大々的に贈呈式もさせていただきました。あの日から1年、当時は東高の一員になれるとは、私は微塵も思ってもいませんでした。だから8月半ば、戀野先生のご厚意により姫路で開催された吹奏楽コンクール県大会を仲間の1人として鑑賞できたのは幸せでした。

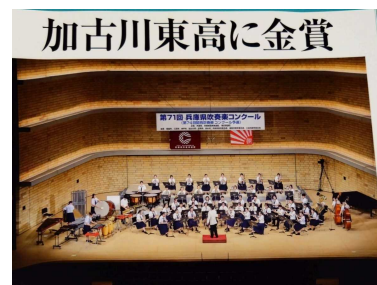


運動部にとっての近畿大会にあたるのが関西大会です。その出場権を懸けた県大会。さらなる舞台に進めるのは、兵庫県から7校、達成できれば東高にとっては8年連続の出場となります。生徒の顔には深い緊張の色です。それもそうでしょう。3年生は5人しか演奏に加わっていないこと、事前に戀野先生から私もお聞きしていました。カコトンプラスの3年生は華も勢いもありましたものね。一方、2年生はどちらかと言えば控えめな生徒が多い印象があります。不安も相当に募っていたことでしょう。

それでも舞台に立った彼らは課題曲を無難に終えると、自由曲へ。戀野先生のタクトに導かれた力強いティンパニと分厚めのホルン。そして一転、途中にはアルプスの山々を思い起こさせるような旋律がリコーダーのみで奏でられます。その強弱があまりに印象的な『モンタニャールの詩』。実にいい演奏でした。

次の世代はちゃんと伸びていますね。結果は金賞、見事に8年連続の関西大会出場です。素晴らしいな、そう思いました。入学し、入部してくれた生徒を伸ばすしかない公立高校にとって、継続的な強化はなかなか難しいことですからね。

前略、伊藤文化財団様、いいご報告ができそうです。ご支援、有り難うございました。



「秋とともに後期がはじまりました」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ この度、生徒に伝えたかったこと

10月1日、いよいよ後期が始まりました。その初日となる始業式に何を伝えたいか、自分なりに色々悩んでみたのですが、やはり最初は生命の話になってしまいました。

最初に、いつもながらで申しわけないですが生命の話をします。もう2週間前のことになりますが、自転車で登校中の県立高校生が加古川バイパスの側道でワゴン車にはねられ、意識不明の重体となる事故がありました。新聞等で報道もされましたので皆さんはご存知かもしれません。

実は6月にも自転車で登校中の県立高校生がダンプカーと衝突して、亡くなるという事故がありました。ともにヘルメットは被ってなかったそうです。

そういうことが重なったせいか、自転車を漕ぐ皆さんがヘルメットを被っていると、ホッとする私がかここにいます。もちろん被っているから絶対に安全とは言いきれません。でも、被ってないよりは…と思ってしまいます。さあ、皆さんはどのように思いますか。

できればヘルメットの着用について、周りの友達やお家の人と話をしてもらえると嬉しいなと思います。自分の生命はたったひとつきりなので、お願いしますね。

話は昨年度に遡ります。「すべての県立高校生の自転車通学の許可要件にヘルメット着用の義務化を」との依頼を、高校教育課長であった私は様々な方面からいただきました。もちろん善意に基づく依頼ということは重々承知です。とは言え、私はその依頼を二つ返事で受け入れることはできませんでした。

その後の展開が思い浮かびます。先生方は守らせるために各地で立ち番をすることになるでしょう。もしかすると生徒の中には、先生方が立ち番をしていそうな箇所まではヘルメットを被らずに自転車を漕ぎ、学校の近くまで来て慌てて被る者もいるかもしれません。近隣から学校への通報は増えるでしょう。「隣の高校の生徒はみな被っているのに、おたくの生徒は全然被ってないで。ちゃんと指導してや」と。

校内でも同じことが言えます。「うちの学年は皆が被っているのに、あんたのところの学年は全然やな。ちゃんと指導してもらわんと困るで…」という会話が飛び交うかもしれません。法的にヘルメット着用は努力義務に過ぎません。でも、それを強引に義務化すると、生じるのは混乱と分断だけのように私には思えて仕方がなかったのです。そのため昨年度の私は、ルール化を決断することができませんでした。

そこで今年度の私は生徒に話をすることにしました。必要なのはルール化でなく、まずは思いを伝えることだと考えたのです。結果はともあれ、伝えることはできました。続けて、ふたつめの話に入ります。

そう言えば、9月最初の全校集会では彼岸花の話をさせてもらいました。お彼岸になると前触れもなく花を咲かせる彼岸花のように、皆さんも今は近くに見守ってくれている人、自分が困っているときに助けてくれる人がそばにいるかもしれませんが、いつかは自分1人で立たないといけない時が来るのですよ、と話しました。そのための準備をしましょうね、という話をしました。

今日は秋にちなんで、栗の話をしたと思います。栗、わかりますよね。秋の味覚、栗です。七世紀のフランスの詩人、ラ・フォンテーヌの「寓話」に『猿と猫』という話があります。こんな話です。

昔々、ある家に猿と猫が暮らしていました。あるとき、家の主人が暖炉で栗を焼いているのを見て、それを食べたくなった猿が、猫にこんなふうを持ちかけます。「君はああいうのを取るのがうまいから、ひとつ、その腕前を見せてくれよ」と。

おだてられた猫は、手をやけどしそうになりながらも、栗を一つ一つ取り出していきます。ところが、その一方で、その栗を猿が一つずつ食べてしまっていた、という話です。ここから『火中の栗を拾う』という言葉は生まれました。

「うまく言いくるめられて、他人のために危険をおかしてしまう」という意味です。しかし最近では前向きに、誰かのために、または自分自身のために、進んで危険をおかす場合にも、使うようになってきています。「敢えて火中の栗を拾う人」、実に格好いいと思います。

熱々に焼けている栗、美味しさに決まっています。香ばしさに決まっています。それを見て、拾い上げる自信がないからか、見ない振りをして通り過ぎる人生もあれば、敢えてそれを拾い上げる人生もあります。

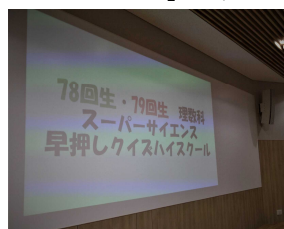
拾えない人になくて、拾える人にあるものは何か。自分への自信です。「自分なら拾い上げられる」という自分への期待です。その根底には努力して能力を培ってきた過去があるのでしょう。

これから先の人生で皆さんは何度も「火中の栗」を目にすることと思います。「それを拾って自分のものにしたら、世の中は、またはこの先の人生は変わる」そう思える何か。その時、見ない振りをするのか、見ない振りをしたくないから日々、自分を鍛えるのか。

この秋の皆さんが、栗を眺める度にこんな話を思い出してくれたらいいな、という言葉をもって、私からの挨拶とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○ 『探究』の時間に思ったこと

3年間の『探究』の学びの成果として、先月末から数人の生徒が『学びの設計書』を校長室に持参して、プレゼンテーションをしてくれました。飛行機の運航管理者や政治家、地域医療従事者、放射線技師といった職業をあげ、自分が心に描く未来を語ってくれる生徒が何人もいました。一方、「世の中にはびこる不自由をなくす仕事に就きたいんです。どんな職業に就けば夢は叶うのか、今はまだ解らないんですけどね」と溢れる思いを語ってくれる生徒もいました。どちらの話を聴くのも頼もしくて、素敵な時間です。



先々週はその隙間の時間に、清流百周年記念館を覗きに行きました。前々から宇野先生に知らされていた『78回生・79回生理数科 スーパーサイエンス早押しクイズハイスクール』の時間です。自主制作の早押しボタンをはじめ、凝った仕掛けの数々に生徒達は大興奮でした。「受け入れてくれるから有り難いですよね」と宇野先生。実に個性的な理数科の生徒達をしっかりと巻き込んでいく宇野先生のエネルギーはなかなかのものです。

一方、はしゃぎまわる生徒達をあたたかく見守る植木先生の優しいまなざしも印象的でした。今は同じ方向を見つめて楽しんでいる彼らも、やがて3年生になると、それぞれの道を歩み始めるのでしょう。

あたたかく見守られながら、そうして時にこの日のように感情を爆発させてもらいながら、成長していく彼らの姿に私は願います。『どうか誰かのために火中の栗を拾える人になれますように』と。



「曼珠沙華に思うこと」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 私が生命の大切さにこだわる理由

県庁の高校教育課において私は8年働きました。そこには兵庫県立高校及び中等教育学校136校で起こった事案が相談として寄せられます。単純計算すると、1つの学校で10年に1度起こるか起こらないかという大事件が毎月どこかの学校から伝えられることとなります。中でも、生徒の自死や警察案件がもっとも多く寄せられるのは夏休み明け。よって、この9月が1年でもっとも緊張を強いられる時期でした。

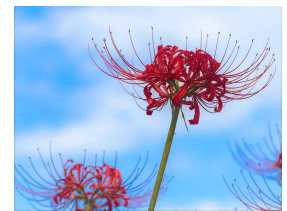
残念なことに今月1日にも県立学校の女子高生が踏切で電車にはねられ、亡くなったとの報道がありました。今夏の本校に、大きな事案はありませんでした。とは言え、生徒の異変に救急車を呼ぶこととなった7月の昼下がり、「もしプールサイドに顧問の神尾先生がおられなかったら」と想像すると血の気が引きますね。側にいて、的確な判断をしてくださったことに心から感謝したこの夏です。そういうこともあり、9月最初の全校集会は先ずは生命の話をしたうえで、少しでも生き方の話をすることにしました。

区切りの全校集会にあたり、皆さんにまずはお礼を言いたいと思います。誰1人、生命を落とすことなく今日を迎えてくれてありがとう。とても嬉しいです。7月終わりの全校集会でお願いしましたね。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」と。お願いを聞いてくれて、本当に嬉しいです。

あの日からほぼ40日が経過しました。どうでしょう。あの日と少し違う自分を感じていますか。感じてもらえていたら、嬉しいです。学習面で成長したという人もいるかもしれません。部活動での技術面で成長した人もいるかもしれません。また、STEAM特別講座で自分の新たな一面を発見できたという人もいるかもしれません。すべてOKです。皆さんの素晴らしい夏に心から拍手を送ります。

一方、あまり変われなかったな、という人もいるかもしれません。実のところ、それは私も同じです。この秋は変われるよう、一緒に頑張りたいですね。

さて、今日は私の好きな花について話をしようと思います。この花です。彼岸花、別名として曼珠沙華とも言います。この花には大きな特徴があります。この花は名前の通り、お彼岸の季節になると前触れもなく花を咲かせ、そしてお彼岸が終わる頃には忽然と姿を消してしまうのです。



自身に課された宿命にまっすぐに向き合うような花。『物事は自分の思惑通りにはいかない』という象徴のような花。その時が来れば、その日その場所で、ただ花を咲かせる。そういう花なんです。しかも花をひらく時、彼岸花は無防備にすべての葉を落とし、茎1本で空に向かい伸び上がります。

孤独であろうと思います。心細いであろう、とも思います。でも、そんな素振りは少しも見せず、ずっとまっすぐに立ち、そして艶やかな花を咲かせます。

人も同じなのだと思います。皆さんも今は近くにお父さんなりお母さんなり、見守ってくれている人、自分が困っているときに助けてくれる人がそばにいるかもしれません。でも、いつかは皆さんもこの彼岸花のように、来たるべき時が来れば自分1人で、その場所で立ち上がらないといけなのです。

まもなくお彼岸の季節です。もし道ばたにこの花を見つけたら、今日の私の話を思い出してくれると嬉しいです。「自分もあの花のようにやがて1人ですっと立ち上がるんだな」、「そのための準備しておかなくちゃな」、そう覚悟してくれると嬉しいです。

それではお互いにいい秋にしましょう、ということをお願いして、私からのお話とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。



彼岸花を見かける度に脳裏に浮かぶ句が私にはあります。「その時が来れば否応なく咲かねばならない曼珠沙華」という意の後藤夜半の句です。その句を教えてくれたのは私が憧れた岡野幸広先生です。御蔭で私はお彼岸の度にこの句を思い出し、身の引き締まる思いになります。去年は立ち寄った多可町で彼岸花を見つけました。やはり、凜とした姿を見せてくれました。

私にとってのこの夏は父の初盆となりましたので、お墓にお線香をあげ、花を飾りました。この世から離れていく生命があります。一方、「家族が増えることになりました」校長室を訪れて、そう教えてくれた方がこの夏は複数おられました。それはとても心が躍るお話です。

2人の子どもが私にはいますが、私に限って言えば子ども達が育っていく過程で、多くの学びがありました。子ども達に、直接学ばせてもらったこともあります。同様に両親の介護をする過程でも多くの学びがありました。より多くの人と深く関わることが、何に付けてもいちばんの学びの種なのかもしれません。

○ さあ、秋の到来です

夏休みも出張の合間に部活動を見させていただきました。多くの部で3年生が引退し、中心となる生徒が入れ替わっていました。3年生は受験に向けて一直線ですね。それでも体育祭で見せてくれた勢いとチームワークの良さを発揮してくれれば、いい結果が待っている気がします。頼もしいですね。

1年生、2年生も進路について考える秋です。それでも明確な目標が定まっている生徒ばかりではないですね。「その気になりにくいだろうな…」そういう心配があった私の気分にはピッタリとはまったのが1年生の学年通信『前人未踏』に掲載されていた上原先生の生徒に宛てた文章です。一部をお借りしますね。

『学校の教室は不思議な空間です。今は同じ授業を受けて同じ教室で過ごしていても、10年後、20年後は、全く違う職業をしていたり、生活を送っていたりします。』

私は高校生の時に広島的女子校に通っていましたが、今、同級生の中には、医師や操縦士、一瞬お笑い芸人になった後に薬剤師になった異色の人や、専業主婦もいて、本当に多種多様な職業をしています。日本国内だけでなく、海外で活躍したり生活したりしている人もいます。今もう一度、同じ教室に詰め込んだら、面白いだろうなあと思います。

今、思うのは、その職業に就いている人は、本人の意志と努力と何らかのきっかけや運が作用しているということです。努力は言わずもがな大切ですが、高校生の間に、自分とその職業を近づけるきっかけやルートを見つける努力を自らしてほしいと思います』

「とにかく勉強したらいいんです」という言葉でないのいいですね。だって人生100年と考えたら、生徒のこれからの人生がまっすぐで平坦な道となる可能性は低いと思われますし、言わばまだ駆け出しですものね。2年生の学年通信『山溜穿石』では岩本先生が書いてくれています。「社会に『控え』というポジションは存在しない。どの立場になっても驕らず、腐らず、変わらぬ姿での底力を」と。

なりたい自分に近づくために、今の自分はどのようにすべきか。そのような問いを常に生徒達に投げかけていただき、ありがとうございます。東高の生徒達を支えているのは紛れもなく先生方の言葉です。

「8月5日はイベントまみれの1日でした」

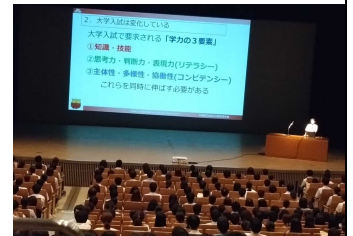
県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 学校説明会、ありがとうございました

先生方には早朝から、加古川市民会館に資料等を搬入していただいたり、来場者の自転車整理をしていただき、無事に学校説明会を開催することができました。ありがとうございました。司会を務めるのは生徒で、マイクをもって説明するのも大半は生徒という東高らしい構成。総務広報部、教育企画部の先生方の事前のご指導はもちろんあったのですが当日の主役は生徒ですので、私は挨拶を短めにしました。

皆さん、こんにちは。加古川東高等学校の校長の新谷です。本日はお暑いなか、お集まりいただき、ありがとうございます。事前申し込みでは600人と聞いていたのですが、会場はご覧の通りほぼ満員となっています。とても嬉しいです。ありがとうございます。

私は東高に通う生徒達の溢れんばかりのエネルギーが大好きです。時間さえあれば、ずっとその姿をみています。また、その生徒達をさらに伸ばそうと全力で取り組んでくれる先生方を誇りに思っています。そして、この学校の学びを信頼してくださっている保護者の方々にとても感謝しています。



この後、まずは総務広報部長から学校紹介をさせていただきます。部長はかつて東高の生徒でした。生徒目線でのこの学校の良さも、先生目線でのこの学校の良さもよく知っています。だから、この学校のことをもっとも愛している先生の1人です。どうか、その言葉を聞いていただけたらと思います。

続いて、東高の教育活動を先生方とともに支えている生徒達から東高の魅力について話してもらいます。この学校に通うことの喜びについて、生の声を聞いていただけたらと思います。

それでは、春の日にまたお会いできたら嬉しいです、という言葉をもって、私からの開会の挨拶といたします。本日もどうぞよろしくお願いします。

大ホール1階はほぼ満席、2階もそこそこ人で埋まっていました。優に1000人を超える中学生とその保護者の方が集まってくれていたのではないのでしょうか。本校に寄せられている期待を強く感じました。

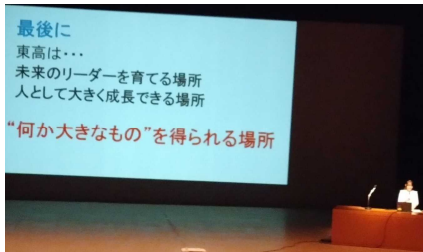
プログラム1番は吉川恭子先生から『加古川東高校の教育について』。学ぶことの大切さを優しい口調でお話しされたうえで、本校で対話を重視した特徴的な授業が可能な理由について説明されました。

『①優秀な生徒が集まっている ②自分の考えを言語化することができるように訓練している ③相手をリスペクトし、傾聴する姿勢ができている ④いろいろな視点から物事をみることで考えが広がり、深化することを知っている ⑤学ぶことが楽しく、意見交換することの楽しさを知っている からです』と。

加えて、締め言葉もよかったですね。『いろいろな刺激と出会い、成長することが大切なんです。出すぎる杭は打たれないので…』そして『出会いが人を作り、環境によって人は育ちます。加古川東は生徒が宝物。生徒が生徒を育てる学校です。加古川東で一生の宝物を見つけましょう』素敵なお話でした。



さあ、マイクはいよいよ生徒に移りました。ひとつめは先月の『シンガポールSGS研修』に参加した1年生生徒からの研修報告です。これが話のまとめ方といい、聞き取りやすい明瞭な話し方といい、秀逸の出来でした。これで高校1年生ですからね。この先の成長ぶりが本当に楽しみです。



続いて生徒会の会長と副会長からは『加古川東高校の魅力について』のお話。中学生にわかりやすいように「加古川東校生の1日」などを面白おかしく話してくれました。そして締め括る言葉は、『最後に 東高は…未来のリーダーを育てる場所 人として大きく成長できる場所 ‘何か大きなもの’を得られる場所です』との副会長の言葉。思わず背筋が伸びましたね。

○ STEAMデー、ありがとうございました

さあ、全体説明会は終了です。その時点で帰られる方とともに大ホールを出た私は小ホールに移動しました。小ホールでは朝からSTEAM特別講座の学びの成果を、8つのブースで発表しています。全体説明会の会場を出た親子が吸い込まれるように小ホールに入っていきます。

事前に他校の複数の先生方からも「見に行っていていいですか…」と要請をいただいていたこの取り組み。STEAM特別講座での新しい学びと体育祭の応援団の熱気だけは直に見ないと伝わらないですものね。見ていただいて良かったです。



生徒には学びの成果を発表するいい機会です。また、いまだ世間的には認知度がさほど高くないSTEAMの学びについて、広く知っていただくいい機会です。こうして大きなイベントを重ねたのは先生方のご負担にはなりますが、いい企画だったなと思いました。中学生にも新たな刺激となったことでしょう。

○ 再び、大ホールへ

さあ、しばしの休憩を挟んだのち参加者の入れ替わりも済み、第2部の理数科説明会の開始。入試の募集定員は40名、それでもざっと400人ほどはおられましたね。この場も私の挨拶は短めにしました。

私は理数科の取り組みを誇らしく思っています。それでも、「百聞は一見に如かず」と言います。この後、理数科の生徒達がクラスの特徴を説明したり、学びの成果を発表したりしてくれます。どうか理数科の教育活動にしっかり触れるとともに、先輩方のその姿をよく見ていただきたいと思います。

理数科は学校の内外を通じて、普通科ではできない、そしてあまり他校では見られない特徴的な教育活動を行っています。科学のすばらしさを体験し、世の中の不思議を解明していく、そんな学びがここにはあります。「自分は強い探究心を持っている」そんな生徒にぜひ入学してもらいたいと思っています。

とは言え、理数科は各学年1クラスの40人です。3年間、クラス替えはありません。また、課題研究でのフィールドワークや実験などに多くの時間をかけており、毎日とても忙しい3年間を送ることになります。そのような環境に「待ってました」と言える皆さん、ぜひ手を上げてくださいね。

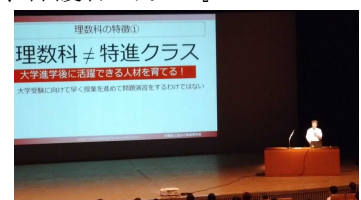
それでは、春の日に再びお会いできますように。本日どうぞよろしくお願いします。

理数科の学びを説明してくれたのは新先生。地歴科の教員でありながら3年間担任をもちあがったこともあり、思い入れたっぷりにお話をしてくれました。特に「理数科は学びを先取りして大学進学の結果ばかりを追いかける特進クラスではありません。大学進学後に活躍できる人材となれるよう、しっかりと力をつけながら、ドキドキワクワクの世界を楽しみましょう」というメッセージは届いたと思います。

そのあと理数科の生徒達は自虐ネタをしっかりと入れ込んだエピソードの数々を披露し、笑いを誘った後、『北極と南極はどちらが寒いかな』についての英語プレゼンテーションと、『関東大震災の甚大な被害に繋がった火災旋風の発生メカニズム』についての研究発表により、知的に締めくくってくれました。

すべてのイベントの終了後、新先生が訊ねてくれました。「あんな感じでよかったんですかね…」と。だから私は答えました。「中学生の子達が『面白そうな学校だな』って思ってくれて、保護者の方が『この学校なら安心だな』って思ってくれたら成功。今日は大成功じゃないかな」って。

来春、『東高で成長したい』と強く願う子ども達にたくさん出会えますように。



「わくわくしたら、STEAM」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ それは国語部会からの依頼でした

先月、国語部会東播磨支部で支部会長を務めておられる校長先生から相談されました。本来なら7月中には研修会を終わらせておくべきところタイミングを逃したため、どの学校も1学期の授業を終える頃で、「皆で参観するものがなくて…」とのことでした。幸い本校には7月末のSTEAM特別講座があるので、「担当の先生方に了解してもらえれば」という条件付きで研修会の会場校をお引き受けしました。

さて、当日です。30人ほどの先生方が本校を訪れました。国語部会の総会が終わり、「さあ、研修会」となる前にSTEAM特別講座について説明する時間がありました。私からは、先生方が負担感をもたれないように、①先生方それぞれの強みを活かして講座をつくっていただいていること、②その講座を学びたい生徒だけが申し込む形で実施していること、をお伝えしたあと、教室棟に移動していただきました。

多くの講座の中から白羽の矢を立てたのは『かがくえほんをつくろう』です。お絵描きアプリを駆使しながら、『自然科学の不思議さを子ども達に伝えるために、オリジナルの絵本をつくろう』という企画そのものの面白さを見ていただくことで、一般的に探究活動にほど遠いと思われる国語の先生方に「こういう方法もありますよ」という刺激を提示できたと考えたのです。



この『かがくえほん』は今年の夏休みにも県立図書館や大阪の中之島図書館から子ども達への読み聞かせを依頼されています。そのレベルに達することをめざし、0からアイデアを練る生徒の姿、その姿を見守りながら必要に応じて議論する坂田先生、鈴木田先生、野崎先生の姿を見ていただきました。いい研修会になったのではないかなと思っています。外部講師の方も含めて4名の先生方に大感謝です。

来られた先生方から訊ねられます。「これは卒業単位に含まれるのですか」と。私は「いいえ」と答えました。多くの先生方は『単位にならない、評価にも繋がらない学び』に夢中になって取り組む、本校生の姿に驚いていました。でも、そのくらい楽しそうに生徒は学んでいますからね。

○ 今夏のSTEAM特別講座

当初、13の講座から始まったSTEAM特別講座はこの夏だけでも22講座が開かれ、延べ547名が受講しています。私も時間の許す限り、覗かせてもらっていますが、興味深い講座がいくつもあります。先生方の熱意に心から感謝です。



結果として生徒にとっては午前中に補習、午後からはSTEAM特別講座や部活動ということになり、御蔭で校舎内はずっと賑やかな夏休みとなっています。



本校生徒に身につけてほしい『新しいことに対してわくわくし、深い探究心を持ち続ける好奇心』をさんざん刺激するSTEAM特別講座。これから先100年後に向けて、繋いでいきたい新しい学びがここにはありますね。



「伝えたいこと 伝えること」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 7月終わりの全校集会にて

何を話したらいいのか、直前まで考えがまとまりませんでした。自分自身を省みれば、制服を着ていた時も教員になってからも、きちんと訊いた覚えがない『校長先生の話』。そもそも体育館は人の話を聴くのに適している場所ではありません。「短時間にまとめないとな」それだけはずっと考えていました。

話す内容がまとまったのは前日です。ふと思い出したのです。前期の始業式のあと、吉川祐司先生に伝えられた言葉。「校長先生の話の最後は絶対に勉強の話やろ、と思っていたんですよ。でも、校長先生は命の話をしましたよね。あれはよかったな」と。そうだよな、命だよな。そう思いついた時ようやく、性根を入れて挨拶原稿に手をつけることができました。

区切りの全校集会にあたり、皆さんにまずはお礼を言いたいと思います。誰1人、生命を落とすことなく今日を迎えてくれてありがとう。とても嬉しいです。始業式の日にお願ひしましたよね。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」と。本当に嬉しいです。ありがとうございます。

人はまっすぐに生きている限り、成長します。4月から4ヶ月が経とうとしています。毎日の学習活動、部活動に加えて、5月の文化部発表会、6月の体育祭のように1人きりでは叶えられないことを、みんなで協力してやり遂げてきた皆さんは、4ヶ月前の自分よりも一回り成長したのではないかなと思います。30秒間、時間をあげます。それぞれ自分の変わったところ、見つけてみてください。

ひとつふたつありましたか。あったら何よりです。私から見ている限り、皆さんは実に眩しい毎日を生きています。特に体育祭の皆さんの輝きは圧巻でした。3年生、凄かったですね。自分たちが精いっぱい取り組んでいたことは言うまでもなく、きちんと1、2年生を巻き込んで取り組んでいました。それが凄いのです。

始業式の日、私は皆さんに伝えました。「リーダーとして集団を動かそうとする際に必要なのは、人間的魅力ですよ」と。「この人とともにありたいと思わせる信頼感、安心感ですよ」と。実に魅力的でしたね。凄いな、心からそう思いました。まだまだ成長しそうで楽しみです。1、2年生はあの背中を目に焼き付けたことと思います。次は皆さんの番ですね。

さて、夏休みです。40日以上の日々をどのように使うか。私から2つだけお願いします。

ひとつは命を大切にすることです。つらいこともあるかもしれませんが、でも、まっすぐに生きてさえいれば、大人になっても楽しいことはいっぱいあります。皆さんには、是非、日々を楽しめる大人になれるよう、しっかりと生き抜いてほしいですね。

ふたつめ。できれば、この夏を「一皮むけた夏」にしてくれると嬉しいです。それは学習の面でももちろん、部活動でももちろん。

もちろん、人間的に「一皮むけた夏」であれば言うことありません。要は周りの人に「洗練されたな」、あるいは「逞しくなったな」と思われたら勝ちです。体育祭で『蛇の皮むき』をしましたね。あのときの生まれ変わるようなイメージです。うろこの下の層が成長をして、新しいうろことなり、やがては表面の古いうろこをはがし落とす、そういうイメージです。



学習面や部活動の面で一皮むけるというのは想像しやすいですね。皆さんも友達を見て、「あいつ、ぐっと伸びたな」と感じる時がありますよね。あれです。おそらく本人は相当、努力をしたのだと思います。



では、人間的に一皮むけるにはどうしたらいいか、1つ簡単だと思える方法をお伝えします。それは出会う人、出会う人にしっかりと顔を見て挨拶することを心がけるのです。私は尊敬する先輩から、こんなことを教わりました。『人間なあ、挨拶が基本や。挨拶の姿勢が悪い人間は、その程度の中身でしかないって人から見られるんや。挨拶くらい格好良くシュッとやれ』と。

以来、しっかりと相手の顔を見て挨拶することを心がけています。すると不思議なことに周りの人が自分のことを何だか大切にしてくれているように思えてきます。すると、もっと不思議なことに、私もまわりの人のことを大切だと思えるようになっていきます。

その結果として周囲の人から「一皮むけた」とまで思われるかは不明ですが、周りの人のことを大切だと思えるようになると、見える世界が少し変わってきます。世界が美しく見えてきます。見える世界がほんの少しでも美しく変化すると、自分がどこにも売っていない、うろこを身にまとっているような気になります。新しい自分として生きているような気になります。

皆さんが一皮むけて、どんなにお金を積んでも買えない、どこにも売っていない、そんな非売品のうろこを身にまとい、美しい世界を生きてくれたら嬉しいな、そう思っています。まあ、これは単なる例え話に過ぎないですけどね。

それではお互いにいい夏を過ごして、9月にお会いしましょうということをお願いして、私からの言葉とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○ 話を終えて…

蒸し暑い体育館、私がいちばん驚いたのは誰1人として自らを仰ごうとしなかったことです。ハンカチをただ流れる汗を拭くためだけに使っていました。手のひらでパタパタと顔を仰ぐ生徒さえいませんでした。文化部発表会を見て、体育祭を見て、あの全校集会の姿を見たら、やっぱり彼らを信じたくなります。

「服装の自由化ではありません。私服登校を可能とただけです」。とはいえ、4月から先生方それぞれに様々なご意見をいただいてきた服装問題。全校生徒の前で松下先生がマイクを持たれました。

- ・「端正かつ簡素であることを旨とし、教育の場にふさわしいものを着用する」と、敢えて曖昧なルールにしている意味をそれぞれが考えてほしい。
- ・どんなに自分が正しいと思っても、ふさわしいかどうかの基準は人によって違うから、先生方に注意されるかもしれない。その時は先生方に思いを伝えて、しっかりと議論すればよい。
- ・自治創造の理念がしっかりと息づく、他にはない学校を君たちと先生方でともに築いていこう。

私は生徒の顔をずっと見ていました。誰も自分自身を仰ぐことなく、じっと聴き入っていました。松下先生の思いは届いていると私は思いました。続いて、この秋に清流会3万人の先輩方から寄贈される清流百周年記念館について吉川恭子先生がお話をされました。

「これはこれまでの100年の歴史の中で加古川東高校に寄せられた信頼の証です。皆さんがその信頼を引き継いでいくんですよ」と。太陽はよりいっそう角度を高くして、体育館の中はさらに蒸し暑くなりました。それでも誰も自分自身を仰ぎません。その光景に私はひとり涙をこらえていました。

加古川東高校は、きっと大丈夫です。



「時間の流れは早いもので…」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ ただの振り返りです

30歳を過ぎたあたりから私は校務分掌や異動について希望を出さない教員になりました。当時の校長先生から『何でもお任せくださいと言えるくらいの大きい人間になれ』そう言われた時、半ば反発心からそう決めました。結果として、初任校で3年勤めたあと、母校で11年、事務局で20年勤めました。

校務分掌はずっと担任でした。学級通信を始めたのは初任校の時です。学校からのプリントを保護者に渡さない生徒が大半でしたので、彼らの日常を面白おかしく、しかも少しだけ持ち上げて通信にしたら、持ち帰って保護者に見せてくれるかな、という実に不純な動機からのスタートでした。でも、実際はそれぞれが自分にとって都合の良いものだけを保護者に見せていたみたいで、まあ、成否は不明ですね。

母校では毎日通信を書くようになりました。調子に乗ってクラブ通信も週に1度は発行していました。働き方改革なんて言葉がない時代でしたから、部活動指導が終わった18時くらいからひたすら職員室横でパソコンを叩いていました。当時の私には生徒に伝えたいことが山ほどあったのです。

やがて教育委員会事務局で働くことになりました。何かを伝えたいと思う相手はいなくなりました。朝から晩まで仕事に追われ、ただ働きました。やがて高校教育課長を任せてもらえることとなりました。その時に気づいたのです。「ともに働く仲間達に伝え残さないといけなことが自分にはあるのでは」と。

近づくだけで鼓動が激しくなるくらい眩しい先輩方がいました。「これをオーラと呼ぶのか」そう知りました。一方、指導と称して言葉尻をとらえては理詰めで厳しく叱りつける先輩方に鍛えられもしました。その双方の影響をさんざん受けたにもかかわらず、気づけば私はどちらにも属さない先輩になっていました。武器がないのです。そこで始めたのが課長通信でした。「とりあえず言葉しか自分に残せるものはない」そう悟ったのです。毎週月曜の朝、通信を出すことにしました。2年で120枚ほどになりました。

さて、この3月、新たな内示をいただきました。加古川東高等学校長という私には畏れ多い内示です。職員名簿を確認します。会話したことがあるのは原田先生と上村事務長、久保田主査くらいでした。『はじめての校長職』を『はじめまして』から始まる方々に囲まれて務めるのです。たまらなく不安でした。

その頃、校長通信を書くと言うことは考えてもいませんでした。そもそも書く必要があるとも思っていませんでした。ただ、私を送り出す高校教育課の課員達はさも当然といった顔をして私に話しかけてきました。「4月からは校長通信ですね。ちゃんと僕らにも送ってくださいよ」と。

実際に4月になって赴任してみると、ここには学校通信をはじめ多くの魅力的な通信が出されていました。「これなら出番はないな…」そう考えました。それでも暗中模索であった立ち上がりの2週間、多くの先生方、事務室の方々に支えられて何とか終わることができた時に気づいたのです。「ここで働く皆さんに感謝の気持ちを伝えることなら、私にでもできるのではないかな…」と。

校長室のドアを開けっぱなしにしておくと、困りごとを相談しに来てくださる先生方がおられます。戯言のような通信に触れ、「先生の通信、楽しみにしていますよ」そう言ってくれる横山先生がおられます。父の死に触れた通信を出した翌日、富田先生はわざわざ朧月の思い出話をしに来てくれました。体育祭で一緒にリレーを走った直後に三谷先生は「楽しすぎました」そう笑いながら走り寄ってきてくれました。

学校長として期待されている役割を果たせているか、そのあたりは疑問符がつきますが、皆さんとの繋がりのおかげでここまで大過なく、しかも楽しみながら日々を過ごせています。ただただ感謝しています。



「どうか届きますように」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ この学校を支えているもの

新聞記事等を用いて日々、生徒に新しい気づきを提供してくれる進路指導部通信『COME ON!! COMMON SENSE』。「出したいから、出してるだけやで」坂田先生はそう仰いますが、誰にでもできることではありません。5月にはサッカー日本代表の元主将で、今は北米で活躍する吉田麻也選手についての朝日新聞の記事を引用されていました。加入1年でチームメイトからの信頼を厚め、主将を任されている吉田選手。

地元記者は彼のプレーを評価した上で日頃の振る舞いも絶賛します。そうした周囲の反応を受けての彼の台詞は「プレーだけ、言葉だけでは伝わらない。両方が大事で、そこは自分の強みだと思っている」。

77 回生学年通信『啐啄』には体育祭応援団長4人のコメント。緑団の団長の言葉から一部抜粋します。「各団の団長へ。この4人で東高100周年の体育祭ができて本当によかった。四者四様の団が完成し、それぞれの個性が爆発した体育祭だったと思う。ありがとう。僕たち団幹部が最高にこの1ヶ月を楽しめたのは、紛れもなく生徒会と先生方のサポートのおかげです。すばらしい体育祭をありがとうございました」

78 回生学年通信『山溜穿石』にはそんな3年生の背中を見つめた2年生に贈られた原田先生からの言葉。「生徒全員がどの競技、どの応援にも全力で取り組んだので、見ていてすべてが楽しかった。閉会式で団幹部が肩を組んで校歌を歌っている姿を見て、彼らの充実感を感じ取ることができた。何事も全力でやるから楽しくなる。適当にやっても面白くはない」



79 回生学年通信『前人未踏』には各クラス体育祭委員の感想。3組委員の言葉から一部お借りします。「新しい競技や応援合戦のダンスなど、新しいものを生み出すだけでなく、東高の応援歌や校歌などが百年の伝統として残り続けていることが凄いなと思いました。東高に入学できて良かったなと思いました。この古き良き伝統と盛り上がりは、チーム79回生として残していかなければいけないと思います」

私服登校を認めるか、いくつかの学校が検討を進めているそうです。「私服登校を認めた加古川東の学ぶ雰囲気は崩れていないですか」他校の校長先生から訊かれることもあります。皆、そのあたりを心配されているのですね。私は「今のところ、ウチは大丈夫かなと思っています」と答えるようにしています。

体育祭のあと、鉢巻きをしたまま下校する生徒を何人も見ました。「鉢巻きしたままだけど、いいの？」私がそう訊ねると皆「このまま帰りたいんです」と笑顔で返事をくれました。『自分はこれだけの体育祭ができるチームの一員だ』という誇り。これが本校の学ぶ雰囲気が壊れない1つの理由だと思っています。

加えて、先生方から、生徒から発せられる『人を思う言葉』が校内に溢れていることも本校の強みです。『前人未踏』で岡先生が服装について生徒に語りかけています。「我々教員は審判としてみんなを裁こうとしているのではなく、ルールとマナーについて共に考えていきたいと考えています。100周年という記念すべき年に入学した君たちはこれからの東高の校則の在り方の道筋を作る重要な役割も担っています」

『他校の制服はNG』それ以外の申し合わせ事項を作るべきか、職員会議で議論となった際に私は結論を預らせてもらいました。先生方お一人お一人の思いも伝えていただきました。まさしく今が岐路です。

それでも「その服装は…」と思われた際にも「それでいいと思う？」と生徒に敢えて訊ねていただき、ありがとうございます。先生方の思いは伝わっていると思っています。次回の全校集会では松下先生にマイクを持っていただきます。生徒指導部長としての東高先輩からのお言葉。私は期待しているのです。

「祭りのあと」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 1時間目「情報Ⅰ」1年4組

感動の体育祭は幕を閉じ、さあ授業再開という日、朝一番に校長室を訪れてくれたのは常陰則之先生です。平成23年から3年にわたり本校校長として勤められたこともあり、ココは勝手知ったる空間。私が常陰先生に初めて出会ったのは20年も昔のことです。当時の私は新人指導主事で、常陰先生は多可高校の学校長でした。以来、長きにわたりお声がけいただき、時には宴席をともにさせていただいた仲です。

当時から常陰先生は情報教育の先駆者でした。まだ情報が必修科目になるとは誰も想像できていない時代です。先見の明があったのですね。本校で退職されてからはそのスキルを活かし、大学や高校で情報教育に取り組んでおられます。



その常陰先生から先月、依頼を受けました。教科「情報」で教員採用試験を受ける大学生に藤井先生の授業を見せてほしい、とのこと。採用試験には模擬授業が課されます。しかし、今の大学生以上の年代は「情報」の授業を系統的に受けた経験がありません。藤井先生の授業力は県下でも定評がありますし、その様子を「見せてほしい」と願うのは私には当然のことのように思えました。

さて当日、常陰先生は大学生2人と高校の先生お2人を連れ、依頼を快諾してくれた藤井先生の授業を参観しに来られました。偶然にその日は愛媛県から「STEAM教育推進の研究指定校となったので学ばせてほしい」と願われる先生も来校されましたので、谷口先生に解説をしていただく前の時間を利用して、藤井先生の授業も見させていただきました。いいものは分かち合わないと、もったいないですもんね。

隣に座る生徒同士でポイントを確認するよう指示をされると、生徒はしっかり話し合います。いい授業でした。教員を志望する彼らがこの経験を活かし、納得のいく授業ができるようになるといいですね。

○ 5、6時間目「イノベーション基礎」1年1組



午後からは「イノベーション基礎」の授業を見せてもらいました。テーマを『加古川駅前再開発について考えよう』とし、「①今の加古川駅周辺の問題点 ②どうすれば滞在時間が増えるような歩きたくなる駅前になるのか、 ③どんな図書館や駅前広場であれば行きたくなるのか」について生徒がグループで討論をする時間です。

生徒とともにグループディスカッションに加わってくれたのは、10人ほどの加古川市役所の方々。その大半は『都市計画部加古川駅周辺再整備推進室』に所属しておられます。日々、仕事としてこの街の未来を考えておられる方々と議論を交わせるのは本校生徒にとって貴重な経験ですし、市役所の方々にとっても自分たちの構想に高校生生の斬新な発想を取り込む絶好の機会です。

次から次へとアイデアを出し、実現可能性について議論する様は見えて面白かったですね。こうした市役所の方々との関係を大切に繋いでいる新先生にあらためて感謝するとともに、自分の思いをきちんと言葉にして議論する1年生の姿に、以前参観した時より成長しているな、そう感じて嬉しくなりました。

○ 祭りのあとに…

いつも生徒の健康を気に掛けてくれる田中先生が仰いました。「大きな怪我や熱中症のない、素晴らしい体育祭でした」。大倉先生が仰いました。「3年生、立派でしたね。私がこれまでに見たなかで、もっともいい体育祭でした」。校内を見て回ります。体育祭と後夜祭の余韻も残る中、1、2年生は授業で、部活動で、一皮むけた姿を見せてくれます。祭りのあとに残されたのは寂寥感だけではないですね。先生方、本当にありがとうございます。



「バトンは次の百年へ」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 体育祭、お疲れ様でした。有り難うございました。

日曜日に降り出した雨は月曜の朝も一向に降り止むことがなかったため、火曜日の体育祭は早々に1日延期することとなりました。迎えた水曜日にはグラウンドコンディションも整い、「いざ、体育祭」との機運が高まりましたが、早朝にJRが京都一姫路間で運行停止となるアクシデント。それでも1時間半後には電車が動き出したので生徒も登校でき、40分遅れで体育祭を開始できたのは本当に幸いでした。

噂に名高い加古川東高校の体育祭をいよいよ見るができます。当日早朝から集まってくださった355人の第3学年の保護者の方々、オンライン視聴していただいた延べ2000人の方々と、私の思いはほぼ同じだったでしょう。そして、その期待はこれっぽっちも裏切られることのない1日となりました。

生徒会執行部の運営も見事なものでしたし、その上をいったのはやはり彼らの指示によく耳を傾け、静かにすべき時は口を閉ざし、騒いで構わない時には大歓声で競技を盛り上げてくれた生徒1人1人の姿でした。さらに団長をはじめとする各団幹部の士気の高さとリーダーシップぶりにも、恐れ入りました。

宇田川先生、玉田先生をはじめとする生徒指導部の先生方が裏方に徹し、支えてくれた御蔭でもあります。これらのすべてがこの学校の強みなのですね。とりわけ学年団の先生方とともに77回生がこれまでの2年間で何を学んできたか、その重みが伝わってきました。その77回生の背中を78回生と79回生は憧れの気持ちとともに、瞳と全身に焼き付けたことでしょう。実に格好のいい先輩ぶりでした。

また、1日を通してどの種目においても懸命に挑む顔、うまくいって喜ぶ顔、うまくいかなくて悔しが
る顔が校庭に溢れていました。競技中の応援席の大歓声は常にやむことなく、地鳴りのように辺りに響き渡っていました。感情を丸ごとぶつけて、この日に挑んでくれた生徒1人1人に感謝感動の1日。



なお、今回のタイトルはプログラム1番の『東高リレー』のサブタイトルからいただきました。このサブタイトルも秀逸なもの揃いでしたが、私が特に強く心惹かれたのがこの「バトンは次の百年へ」と『大縄跳び』のサブタイトル「自分の翼だけでは人は”跳”べない」でした。なかなかいいセンスです。

それでもやはり1番の見所は全校生が学年を超えて4つの団に分かれ、1ヶ月の団活動で仕上げてきた応援合戦でした。240人ほどで構成された各団が、それぞれ10分という持ち時間を最大限に活かしたパフォーマンスを見せてくれるのですから見所満載です。観客席の皆さんも圧倒されていましたね。

閉会式のあと、別れを惜しむように集まり語り合う各団の姿を見つめながら、私は1人、今年の始業式や入学式で生徒達に向かって話したことを思い出していました。



自らが考えた『在りたい社会』を実現しようとする際、一人の力では限界があります。そのような時には周囲の仲間を巻き込みながら、協力・協働してもらうことが不可欠となります。リーダーとして集団を動かそうとする際に必要となるのは、やはり人間的魅力です。「この人とともにありたい」と思わせる安心感、信頼感です。それこそが本校の校訓「明朗親和」が求める、皆さんに身につけてほしい資質に他なりません。

もしかしたら私は『言わずもがな』のことを言ったのかもしれませんが。



「この世界は美しい」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ NHK杯全国高校放送コンテスト兵庫県大会第3地区予選での話

今月始め、放送部のNHK杯の予選が本校で開催されました。会場校となるため「朝から学校にいてくれたら…」と志水先生に依頼されました。私は「喜んで」とお答えしました。文化部発表会の前日も校長室を訪れ、「作品を見て感想をいただければ…」とお願いしてくれた放送部です。断るはずがありません。

当日、志水先生、上岡先生、傍士先生は早朝から受け入れ準備に取りかかっておられました。私はと言えば役割らしい役割は開会式と閉会式での『会場校の校長挨拶』ぐらいです。あとはフリーでしたので、プログラムの本校生徒の名前欄をチェックし、すべて見せてもらう準備を整えました。

本校生徒の出番は、本番勝負といった趣のあるアナウンス部門の2人と朗読部門の3人、そして制作した作品を披露するラジオドキュメント部門と、ラジオドラマ部門です。アナウンス部門と朗読部門では緊張した様子も見せずに、皆よく頑張っていたと思います。結果として県大会出場は果たせなかったものの、朗読部門で2人が佳作に入りました。



さらに好成績を収めたのはラジオドラマ部門の作品『人類のために』でした。主人公は「愚かな人類から脱却するためにA I ロボットに意識を丸ごと移してしまった」母親とその娘でした。「将来はピアニストになりたい」と夢を語る娘に、母は諭します。「人間のピアニストなんて必要がないからやめなさい」と。「人間はミスをするけれど、A I ロボットに任せたら常に完璧に弾けるのだから」という論理です。娘は抗うのですが母親は聞き入れず、結局は娘もA I ロボットとして生きていく、というストーリーです。

『人間の不完全さ』の否定に見せかけながら、作者の思いは違うのでしょうか。その逆説的な作りに唖ってしまいました。審査結果は3位。5位入選のラジオドキュメント部門とともに県大会出場を決めました。

○ 不完全だからこそ…



いよいよ体育祭が今週に迫ってきました。放課後の中庭は体育祭の練習に励む生徒の声で溢れています。出張も会議もない日には、その練習風景をぼんやりと眺めているのが最近の私にとって何より贅沢な時間です。ムカデ競走の練習や大縄飛びの練習では失敗する度に悲鳴のような声が上がります。でも、うまくいった時には雄叫びのような声も響き渡ります。

不完全だからこそ完璧さを追い求めて努力する。それは1人での営みとしては孤独に陥りやすいですが、学校では人と深く関わり励まし合いながら、その営みに向き合うことができます。このような経験は学校ならではの学びと言えるかもしれません。実に美しい光景です。

春先から校長室を華やかに飾っていた胡蝶蘭は気温の上昇とともに花びらを落とし始め、もう随分と寂しい姿になりました。多くの先輩方や後輩達がようやく教育行政を卒業できた私を応援して贈ってくれたものですが、そのなかのお1人に県立錦城高校の校長でご卒業された岡田眞和先生がおられます。

岡田先生は教えてくれました。「定時制のうちの生徒は『ありがとう』をよう言わなかったんや。それはな、人から『ありがとう』って言ってもらった経験が少ないせいや。だから、ボランティアをたくさんさせたよ。すると、人からたくさん『ありがとう』って言ってもらえるやろ。そうするとやがて自分から『ありがとう』を言えるようになるんや。新ちゃん、そういうのを成長って言うんやで。」

岡先生や吉本先生はそんな生徒達と時間をともにしてきたんですね。今ここにも不完全さをさらけ出しながら、汗を流す生徒がいます。この世界は美しいと僕は思います。



「高校総体を見ていて思い出したこと」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ とある日曜日、三田学園高校のグラウンドで…

その日、朝から車を走らせて三田学園のグラウンドに行きました。宇田川先生から事前に「世紀の番狂わせを先生に見せたいので、よかったら来てください」と誘われたのが理由です。県高校総体サッカーの3回戦。本校の相手は優勝候補の一角である三田学園です。

県立学校であれば特別支援学校も含めて全校を訪れたことのある私ですが、さすがに私立の三田学園の門をくぐるのは初めてです。そこから少し坂を上ってゆくと校舎前に広がっているのはサッカー部専用のグラウンド。その回りは陸上競技の練習用の青いオールウェザートラックがぐるりと囲んでいます。

運動部であれ、文化部であれ、生徒のために思って必死に指導してきた先生方であれば、誰もが1度は感じたことがある施設設備についての絶対的な格差。でも、それを単なる言い訳にしないで真っ向勝負をすることこそが、公立高校教員の誇りだと信じ、私も取り組んできました。とは言え、羨ましいことには違いありません。



試合は2対0で惜敗。でも、時折降りしきる雨の中、生徒はよく頑張っていました。なお、本校に苦戦したのが良薬となったのか、三田学園はその後の4回戦からは8対0、7対0と完勝。強さを見せつけます。さあ、生徒は何を感じたでしょう。「やっぱり相手は強かったな」「でも、善戦したよな」で終わると未来は変わらないですよな。「そうか、そういうボール捌きもあるのか」とか、「ココを磨けば自分も化けられるかな」とか思ってくれたらいいな、そんなことを思っていました。

○ とある土曜日、向島公園のグラウンドで…

その日も、朝から車を走らせました。行き先は向島公園のグラウンド。「勝てば次の試合は但馬ドームです」と岩本先生から教えてもらっていました。3年間、部員が少なく単独チームが組めない時も、他校と合同チームを組みながら乗り切ってきたソフトボール部員達が、1年生の入部もあり『加古川東』として皆同じユニフォームで出場するのです。こんなに嬉しいことはないですよな。

試合は5イニングで相手打者15人を完璧に抑えた会心の勝利。打線もよく繋ぎましたし、2人の新1年生もバントを正確に決めるなどして勝利に貢献しました。さあ、生徒は何を感じたでしょう。「これで次もいけるな」だけでは物足りないですよな。でも、生徒の表情は全く緩んでいなくて、そこに頼もしさを感じました。



○ 先生として働くことが大好きなのは私も同じなのです

時間の許す限り、生徒の活動を間近に見ていたいと思っています。よく先生方から「せっかくのお休みの日に申し訳ないですね」と気遣っていただきますが私は実のところ心から楽しんでいます。生徒は私達の言葉がけひとつで成長する瞬間があります。その瞬間をともにしたいのです。実に素敵な仕事ですよな。

しかし、世間では教員希望者が不足しています。そう聞かされる度、自分たちの仕事についての魅力発信力の乏しさを感じます。同時に管理職を希望する人の減少も常に叫ばれています。でも、「当たり前やろ」かつての私は管理職離れについてはそう思っていました。「こんなに素敵な仕事を手放せるか」と。

それでも私は36歳のときに学校現場を離れました。「よくあの時、決断したよな」各部の頑張りを見ていて、ふとそう振り返ります。結局、私は20年にわたって学校を離れ、教育委員会に勤めることとなったからです。でも、もちろん今は後悔していません。なくしたモノもあった気はしますが、得たモノもあるからです。多くの師匠に出会うことで、私は少しだけ成長できたような気がしています。

「聴かせていただき、ありがとうございます」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 職員室の先生方の面談が終わりました。ありがとうございました。

60人の先生方からお話を聴かせていただきました。随分と学校から離れていた私にとっては「どんな思いをもって授業をしているか」「生徒にどのような期待をもって部活動指導をしているか」「生徒が安心できる居場所となるよう、担任として何を心がけているのか」という話はとても温かくて、心に染み入りました。やっぱり先生って素敵な仕事だな、改めてそう思った私です。

一方、うまく言葉をおかえしできなくなるお話もありました。その多くはご自身の心身の健康状態についてのお話と、ご家族の介護に関わるお話です。ともに自分の思い1つでどうにかなる話ではないですし、解決策がなかなか見つけにくい話でもあります。そこで、今回は後者の方のお話を。

長年の介護が必要だったお母様をお見送りになられた先生からは「心配事が1つ減りました」というお話を聴かせていただきました。心の中の澱のように、家族が要介護状態となると24時間心配は絶えないですもんね。そのお声から、そのお顔から深い安堵感が伝わってきました。

もうひとつ。2年前にやはり要介護状態であったお母様をお見送りになられた先生からは「母は私に『生き方』に加えて、最後に『人の死にいき方』を教えてくださいました」というお話をお聴きしました。この話もう胸を打ちました。これまでそんなふうに思えたことが私には1度もなかったからです。

○ 私にとっての家族の介護。

私にとっての介護は8年半前に始まりました。それまでの私は盆暮れを含めて年に数回、埼玉県の実家に帰省していました。しかし、人事担当の筆頭をしていた平成27年、私は多忙を理由に半年ほど実家に寄りついていませんでした。そんな11月のある夜、母から泣き声の電話がありました。異変を感じた私はとりあえず夜行バスに乗り、一路関東へ。明るく朝、知らぬ間に荒れ果ててしまった実家を目にします。

母はすでに家事ができなくなっていました。風呂にも随分と入っていないようでした。父はそんな母を強く責めてばかりいました。私はとりあえず母を風呂に入れ、病院に連れて行きました。認知症でした。区役所等をまわり、要介護認定をしてもらい、デイサービスに支援してもらえよう環境を整えました。遠方に住む私には日常の世話ができないからです。

その当初は父も母の病状を理解し、献身的に母の日常を支えてくれました。しかし、老老介護というのは精神的にも肉体的にも実に厳しいものなのですね。月に2度ほど帰省する息子の助けを借りながらも、母が施設にお世話になることに反対し続けて世話をしていた父でしたが、1年ほどで音を上げました。

そこからは施設探しです。仕事柄、2日続けて不在にすることはできませんから、夜行バスを用いて月に何度も帰省しました。仕事を終えたら夜行バスに乗り込み、翌日は通院介助と施設見学に走り回り、再び夜行バスに乗る、そんなとんぼ返りの末、雰囲気の良いグループホームを見つけることができました。そして、そこで母はお世話になることになりました。

「これで母の日常は安心だな」そう思ったのも束の間、安堵感からか、それまで介護する側だった父が認知症になります。その状態での1人暮らしはとても心配だったのですが、アルコール類が好きでたまらない父にとって、施設入所は人生最大の楽しみを奪われることに他なりません。頑なに拒まれました。

そこで私の遠距離介護第2章が始まります。とりあえず自転車が漕げる父にとっては、ご飯を炊きさえすれば惣菜を買って来て食事はできます。洗濯機も回せます。それなりに生活はできていました。

それでも次第に自転車で迷子になったり、転んで救急車に運ばれたり、といったエピソードが生まれ始めます。休みがとれそうな日を見つけては仕事帰りに夜行バスに乗り込み、通院介助や食材ストックづくりをし、日用品の買い出しなどをしたら夜行バスで戻ってくる、そんな日常が始まります。振り返るとトータル6年間、そんなことをしていました。

夜行バスの良い点は新幹線と比較して圧倒的に経済的であることに加え、1日休みを取りさえすれば、その1日は朝早くから夜遅くまで存分に使えるという利点もあります。また、その1日の終わりには私がつくった料理を肴に、2人でひたすら杯を傾けました。これは私にとってのご褒美でもありました。

毎回、夕方5時くらいに飲み始め、バス乗り場に移動しないといけな時間まで、ひたすら話を聴きました。お陰で私は父の生き方というか、生き様について随分と詳しくなりました。そのことを昨年父の日に通信で書きました。今回、添えときますので、お時間があれば付き合っていただけると幸いです。

それなりに穏やかな日々。でも、転機は突然にやってきます。一昨年の末にコロナウイルスに感染し、10日間の隔離入院となったあと、父は自転車を漕ぐどころか歩くことさえできなくなってしまったのです。認知症も一気に進み、とてもじゃないけれど1人では暮らせないという診断を医師からもされました。施設入所を拒む気持ちさえ持てなくなるほど、歩行力と同様に認知能力も失われてしまったのです。

私の遠距離介護は第3章に入りました。月に1度帰省し、両親がお世話になっている施設を訪問する、それだけの日々です。身体は随分と楽になりましたが潤いはない日々です。5月13日には父が入院しました。軽い脱水状態とのことでしたが、17日には肺炎を発症。医師から「病状を説明したい」と電話がありました。幸い21日から23日までは埼玉への出張です。23日の午後に訪問しますと伝えました。

しかし21日、東に向かう新幹線の車中で突然に携帯電話が鳴ります。父が入院している病院から。「できれば今日、病状を説明したい」とのこと。私は病院に向かいました。そこで「現在はコロナ患者も入院しているため、すべての患者の面会を禁止していること」、とは言え、「遠方から来てもらったので僅かな時間であれば特別に面会を許可すること」、そして、「父の先は長くないこと」を告げられます。

その後、病床の父と対面させてもらいました。父は酸素マスクをつけていました。「来たよ。わかる？」と話しかけると父は2回頷きます。手を握ると父は私の手を強く握り返しますが、呼吸が荒く、あまりにつらそうでした。遠距離介護をしてきた日々が頭の中を巡ります。涙が止まらなくなりました。

翌日、遺体安置所で私は父と2人きりになりました。「なかなか自転車が漕げるようにならない僕を、何度も小学校の校庭で練習させてくれて有り難う」そう言いました。「運動会でしか活躍できない僕のために、いつも応援席の一番前に陣取って大声で応援してくれて有り難う」そう言いました。

「中学校の時ほとんど家に帰らないで遊び歩いていた僕を、見捨てないでいてくれて有り難う」そう言いました。「教員採用試験の前日に不安で喋れなくなった僕に『おまえ1人くらい食わせてやるから、何回落ちたっていいぞ』そう笑ってくれて有り難う」そう言いました。

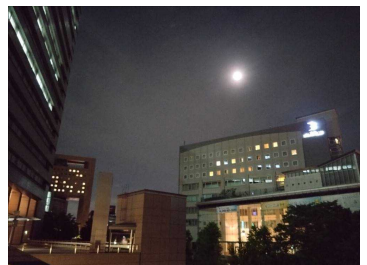
私の親族は皆、東京在住なのですが「浩ちゃんが来るのを待っていたんだな」口々にそう言ってくれています。偶然とは言え、本当に有り難い出張でした。

五ノ井先生。心配事が1つ減りました。でも、つらいですね。

下村先生。『生き方』だけでなく、『死にいき方』も学ぶことができました。でも、せつないですね。

遺体安置所からの帰り道の空には朧月。ふとシャツの袖を見るとカフスボタンが片方なくなっていました。前々からお気に入りの銀色のカフス。

「持って行くつもりなんだね、親父」月に向かって、私はそう呟いてみました。この通信を皆さんが読んでくださる日、いよいよ父の告別式です。



「父の日に思うこと」

高校教育課長
新谷 浩一

○ ささやかな彼の人生

昭和10年、彼は東京の下町で建具職人の長男として生まれました。戦争が始まり、やがて広島に疎開すると地元の子供達へのいじめの対象になります。時に肥えだめに嵌められました。バケツに貯めた小便を頭からかけられたこともあります。預かってくれた家庭でもその家の住人と同じ食事は与えられません。でも、不満や愚痴は口にできない日々でした。やがて東京に戻ることに、原爆が落ちる少し前に広島から離れました。

帰京しましたが戦後の家族揃っての生活は苦しく、昼食時は麦御飯に梅干しが1つの弁当をクラスのみんなから隠れて食べました。遠足などに行くお金が家にないことも解っていましたから、学校行事のお知らせは親に見せませんでした。そして当日は学校に行く振りをして家を出ると、1日中あてもなく町をふらつきました。

やがて父がアルコール中毒になります。夜まで帰宅しない日には母から「探しにいきなさい」と命じられます。それがたまらなく嫌でした。父はきまってドブの中に倒れ込んで寝ていましたから。びしょ濡れで異臭を放つ父に肩を貸して家まで帰る時、すれ違う人々の刺すような視線にたまらなく惨めな思いをしたものです。

学ぶことが好きで、大学にも行きたいと思いました。でも、働けなくなった父の分まで働く母にそんなことを言い出せるはずもなく、諦めました。商業高校を卒業し、薬品関係の会社で営業職として働き始めました。

やがて好きな人ができました。東京の実家で一緒に暮らすようになりました。子どもができました。(それが僕だ) でも、母との折り合いが悪く、妻は子どもを連れて家を出て行きました。彼はさんざん悩んだ末、母を捨て、実家から離れることにしました。親戚からも絶縁された彼は、横浜の社宅に親子3人で暮らし始めました。当たり前のことですが家財道具と呼べるようなものが殆どない部屋でそれは貧しい暮らしぶりでした。

彼はだから必死に働きました。そのためか彼は、気づけば社内でも稀な高卒学歴の部長となり、最期は関連会社の取締役まで任されました。あまりに奔放に育ったため将来を案じていた息子も何とか就職し、手を離れました。そして迎えた還暦。退職した翌月、ホテルの最上階で彼はビールを飲みながら息子に語りかけました。

「浩一。俺は、全部やり終えた気がするよ」彼はそう言いました。「もう、これからは自分のためだけに生きてもいいよな」息子は黙って頷きました。「農園を借りたんだ。そこで土と戯れながら、人間らしくゆっくり生きてみるよ」息子は関西で一緒に暮らすことを提案しましたが、彼は断りました。「いいよ。俺は老いぼれるまでは自分の足で立って生きるよ。そのかわり立てなくなったら頼むな。俺はおまえに世話してもらいたい」

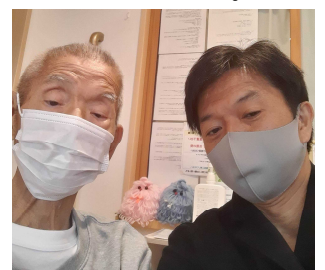
それから30年弱、息子の助けを借りながらも自分の足で何とか生きてきた彼ですが、昨年12月、新型コロナウイルスに感染し、隔離入院となりました。そのひと月後には1歩たりとも歩けなくなり、そのまま介護施設に入らざるを得なくなりました。発症前日まで自転車を漕いでいた彼の日常生活は突如、奪われたのです。

でも、すべてを運命だと受け容れているかのように彼の表情は穏やかそのものです。それはもしかすると、隔離入院となる2週間前、身の回りの世話をするために訪れた息子に既にこう伝えていたからかもしれません。

「世間がおまえを優れた人間と見るか、ろくでもない人間と見るか、そんなことはどうでもいいんだよ。ただ、おまえは俺にとってはよく出来た息子で、そしておまえの中に流れているのは紛れもなく俺の血だ。だから、俺の人生はおまえを残せただけで十分満足なんだな」

彼はもう息子の名前さえ忘れてしまいました。でも、ささやかな彼の人生を息子が忘れることはないのでしょう。その生き様をさんざんに見せつけられているのですから。

家庭、学校、職場、仲間…。実に多くの方に学びながら、僕は日々を過ごしています。



「支えがあること」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 文化部発表会、本当にお疲れ様でした

5月2日の文化部発表会に向けて、これまでの私の経験では想定外の依頼が相次ぎました。まずは生徒会からのオファーです。開会行事で流す注意事項のフィルムに教頭先生とともに出演してほしい、とのこと。教頭先生とともに学生服を着て、自分たちが踊る動画をSNSにあげたことで、お母さん役の吉川恭子先生に叱られ、頭をひたすら叩かれるというのが、私の役割です。



私と教頭先生以外にも多くの先生方に出演依頼をして、生徒会が編集したという4分間の「全生徒への注意事項」動画。その出来はシナリオ演出とともに素晴らしいもので、発表会当日の体育館は大爆笑でした。後日、生徒会スタッフが校長室に来てくれたので、そう伝えたと「あれぐらい、なんてことはないよ」って顔をされました。加古川東高校生徒会、恐るべしですね。

吹奏楽部からの依頼は「体育館でタクトを振ってほしい」とのこと。しかも、希望者が何人か振った後、「いよいよラスト」という場面で立候補し、フロアから「かことんブラス」の前に進み出て、校歌吹奏のタクトを振るという脚本。タイミングを含め、難しい依頼です。でも、断るという選択肢はありません。

私は校歌を口ずさみながら、精一杯タクトを振りました。一方、めちゃくちゃに長い大きなタクトを持参して、自分の出番に備えていた方を見て圧倒されました。朝長先生、あれくらいエンターティナーに徹するべきなんですね。授業と同様の熱いパフォーマンス。深く学ばせていただいた私です。

一方、放送部からの依頼は制作済みの作品を改良し、今年のコンテストに提出予定なので「鑑賞のうえ、ご意見をください」とのこと。2本ともしっかり見せていただきました。ともに見応え、聞き応えあるものでした。後日早速、放送部の生徒は意見を聴きに来てくれました。今年のコンテストが楽しみです。

他に、本校の28代校長をされていた安積秀幸先生からも事前に「遊びに行くで」と言っていたいていました。安積先生が校長をされていた平成21年、私は県教委で人事担当をしていましたので、当時から無理を聞いていただいたり、お聞きしたりする仲です。



退職されてからは陶芸に凝っているようで、既に100個を超える茶碗を焼かれたとのこと。本校茶道部にも「貰ってもらっているんや」と話をされます。私も譲っていただきました。瑠璃釉のものと織部釉のもの。早速、使わせていただいています。いい趣です。有り難い限りですね。

さて、前日まで「1つでも多くの発表を見ることができた」と思っていた発表会でしたが、結果として事前に話のあった生徒会、放送部、吹奏楽部、茶道部の活動はしっかりと見る事ができたものの、残りの時間は校長室でした。有り難いことに同窓会の方や議会関係の方、地域の方がご挨拶に来てくださいましたし、さらに有り難いことにそれより多くの生徒が「胡蝶蘭鑑賞」という名目で校長室を訪れ、話をしてくれました。

先生方にとっては日常のことでしょうが、私にとっては希有なことです。とても楽しく貴重な時間でした。

1日を通じてひたむきな生徒の姿。加えて、私にはもうひとつ印象的な姿がありました。生徒会と密に連絡をとりながらも黒子に徹し、発表会を支えた宇田川先生、玉田先生のお姿です。不意に思い起こした景色があります。先月、見せていただいた野球部の練習試合。前半5イニングが終わると吉川祐司先生がカートを押します。カートの通過後はきれいに土がならされ、何もなかったかのように後半戦が始まる、という景色です。



『加古川東高校は生徒が自主的・自発的に活動する学校』人はそう評します。でも、その背景に多くの方々の支えがあること、いちばん気づいているのは本校の生徒かもしれません。

「光はつねに東より」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 入学式の式辞は校訓を意識しました

校長先生を経験された先輩方から教わっていました。「式辞に品格がないと、先生方から失望されるからな。時間をかけて、いいものを作らないとあかん」と。とは言え、3月いっぱい県庁で働いていましたから、とてもじゃないけれど前もっての作成などできません。4月になって赴任してからやるべきことは盛りだくさんで、取りかかりは3日の日の隙間時間でした。そこからは精一杯言葉を紡ぎ、核心部分は校訓をまじえながらこんなふうにとめました。

変化の激しい時代を生きる皆さんには想定外の事象とまっすぐに向き合い対応する力や、模範解答のない、正解の解らない不透明な未来を自らの手で切り拓いていく力を身に付けることが求められています。そのために、まずは「こういう自分になりたい」という『在りたい自分』を頭の中に描いてください。「どんな大人になりたいか」「どんな仕事に就きたいか」それが揺るぎない自分づくりの第一歩です。

理想の自分が描けたら、「こういう社会にしたい」という『在りたい社会』を頭に描いてください。「自分たちが生きる社会はどのような社会であってほしいか」。こうして理想とする自分や、理想とする社会を頭に描き、胸に刻みつける構想力こそが本校の校訓「自治創造」が求める、皆さんに身につけてほしい力です。現状から一歩前に進もうとする際、この自分ならではの構想力は欠かせないものとなります。

さて、実際に自らが考えた『在りたい社会』を実現しようとする際、一人の力では限界があります。そのような時には周囲の仲間を巻き込みながら、協力・協働してもらうことが不可欠となります。『在りたい社会』の実現に向けて、リーダーとして集団を動かそうとする際に必要となるのは何か。やはり人間的魅力だと私は考えます。「この人とともにありたい」と思わせる安心感、信頼感です。それこそが本校の校訓「明朗親和」が求める、皆さんに身につけてほしい資質に他なりません。

新入生の皆さんには本校の校訓「自治創造」と「明朗親和」とを常に意識して行動することで、『在りたい自分』と『在りたい社会』が存在する『在りたい未来』を創り出す人になってほしいと、心から願っています。私達とともに成長しましょう。

○ 最近は校歌を意識しています

13日の土曜日、私は西脇高校にいました。今年度に入り、坂田先生から女子バレーボール部監督を引き継いだ玉田先生から「応援に来てください」と誘われたからです。



でも、体育館に入るなり笑みがこぼれてしまいました。立ちあがって生徒に指示をする玉田先生の後方のベンチに吉田教頭先生と坂田先生が座っていたからです。こんなに強い応援団は他にいないですね。玉田先生のひたむきな監督ぶりのもと、吉田教頭、坂田先生の生徒愛、母校愛に見守られた女子バレーボール部員はひたすらボールを拾い、懸命に繋いで見事全勝。2部リーグへの昇格を決めてくれました。

3日後の16日火曜日は1年生のクラス対抗による校歌コンクール。野口先生が審査員の依頼に来てくれたので見せてもらうことができました。準備期間は短かったにもかかわらず、どのクラスもきっちりと歌っていたのは見事でしたね。審査員は私と吉田教頭先生、吉川恭子先生、そして学年主任の大倉先生。

審査結果を待つ間に講評を求められました。私は「いい高校生活を送ると、歌詞への思いがもっと深まりますよ」とありきたりのことを伝えました。大倉先生は各クラスのまとまりを絶賛。吉川先生からは「もっともこの校歌を、この学校を好きになりますよ」と母校愛にあふれるお言葉。1年生もすっかり聴き入っていました。『光はつねに東より』この歌詞のもつ意味を感じながら過ごしている、最近の私です。

「変わりつつあるもの 変わらないもの」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 4月の第1週のお話

4月1日の朝は県民会館で辞令交付式でした。教育長の訓話をお聞きし、辞令を受け取ったら、いよいよ初出勤です。校門を通過したところで部活動のために登校してきた生徒とすれ違います。「おはようございます」と声を掛けられたので、「おはようございます」と声を返します。かつては当たり前だったことが久しぶりであるというだけで、たまらなく愛おしいものになります。胸が弾みました。

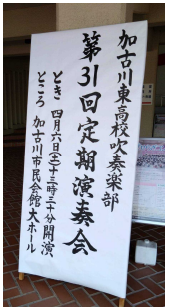
玄関では事務室のメンバーが出迎えてくれます。これも嬉しいことでした。そして息つく暇もなく校内の辞令交付をさせてもらい、校務運営委員会、職員会議を開催するという流れ。でも、今になって振り返ると自分が何を話したのか、記憶がないのですね。相当、緊張していたのだと思います。

2日、3日は新着任の先生方と一緒にオリエンテーションを受けたり、加古川市役所や地元選出の県会議員の事務所をまわったりしました。幸いなことに加古川市の小南教育長は元上司であり、県会議員もみな顔見知りですので、そのあたりは有り難いことです。自然と気持ちが落ち着いてきました。5日の夕方には入学式の式辞も完成。とりあえず第2週目を迎える最低限の準備は整いました。

明るる日の6日は週休日、昼過ぎから加古川市民会館へ。戀野先生からチラシをいただいていた吹奏楽部、通称『かことんプラス』の第31回の定期演奏会です。夏の全日本吹奏楽コンクールでは7大会連続の関西大会出場を果たしている強者集団であること、音色を巻き込むような戀野先生の名指揮者ぶりなどは前職の時からよく知っていました。でも、この日は新たな発見がありました。



部員のみで構成を考えたという学生指揮者がタクトを振る『学指揮ステージ』や戀野先生が率いるOB合同ステージなどでの演奏は言うまでもなく素晴らしいものでしたが、私がもっとも惹きつけられたのは演技あり、ダンスありの企画ステージ。「こんなこともできるんだな…」とその幅の広さに感心していました。



その時のことです。例えば誰かが台詞に詰まった時、「がんばれ、思い出せ」そんなふうに念じている自分がいました。とてもシャープな踊りを見せてくれる誰かを、勝手に誇らしく思っている自分がいました。やがて「この子達の成長を見守りたい」そんな思いが沸き起こります。自分がすでに加古川東高校の一員になりつつあると気づいた瞬間です。その気づきが始業式の私から生徒に向けての話に繋がります。

僕からの願いは「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」ということです。僕がこの3月まで働いていた高校教育課では、県立高校生の誰かが生命を落とすと、連絡が入ってきます。特に事故など、不意に生命が奪われた時には必ず即座にです。亡くなられた生徒の日常生活を、僕は知りません。それでも哀しくなるのが常でした。では、亡くなった生徒のそばにいた友人は何を思うでしょう。育ててきた保護者の方は何を思うでしょう。自分の生命と他人の生命を同じように大切にしてください。どうか、よろしくお願いします。

かつて、いじめによる生徒の自死があったあと、『事案を正確に把握できず、結果として校内での情報共有等も不十分であった』という理由で処分された若手の先生と話をすることがありました。「自分は教壇に立ち続けてよいのですか」と彼から訊ねられました。だから私は「先生は子ども達に生命の大切さを語ってくれますよね。子ども達の変化に気づいてくれますよね。どうかこれからもお願いします」と深く頭を下げました。子ども達の成長を見守ること。それはどんなに時代が変わっても、学校が果たすべき大切な役割だと思います。

かことんプラスの『うた心』を感じるとともに、自分の中で変わりつつあるものに気づき、変わるものがないものをあらためて認識できたひととき。かことんプラスの皆さん、戀野先生、本当に有り難うございました。

「加古川東高校に赴任して」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 疾風怒濤の日々でした

3月15日、いただいた『加古川東高等学校長へ』との内示は、私にはどこか遠い世界で起こっている出来事のように思えました。翌週19日に控える各校での学力検査の合格発表と、26日に予定されている追検査とをいかに無事に終わらせるか、当時の私はそのことにしか頭が向いていなかったのです。

県教委事務局の高校教育課には日々、県立学校136校から様々な課題が寄せられます。その1つ1つについて、校長先生方とともに解決するよう舵取りをすること、これが私の前職である高校教育課長のもっとも重要な職務なのですが、同時に高校入試を公平公正に実施することも、また重要です。入試で不手際があると、教育長の顔に泥を塗るだけでなく、兵庫県教育委員会そのものが信頼を失うことに繋がってしまうからです。

そのため、志摩校長先生から校務を引き継ぐためにこの学校を訪れることができたのは、追検査が無事に終了した27日でした。県庁から電車を乗り継ぎ加古川駅へ。ふと22歳の頃の記憶が蘇ります。教員採用試験の一次筆記試験の会場がここ加古川東高等学校だったのです。当時は平屋建ての駅舎でした。はじめて通る道に戸惑い、しまいには大学の先輩に導かれながら校門までの道のりを歩いたことを思い出しました。

あの日が私にとって、教員としての『はじめの1歩』でした。その後、初任者として但馬地区で勤務したのち母校で長く務めたこともあり、高校を2校しか経験していない私にとって、校長としてのはじめての赴任校が『はじめの1歩』の学校となったわけです。運命的なものを感じながら降り立った加古川駅は建て替えられ、高架化された駅舎にかつての面影はありませんでした。



改札を抜け、ロータリーの手前で何気なく見上げると、駅前商業施設の壁面の垂れ幕に目がとまります。『加古川東高校は2024年 創立100周年を迎えます』。その時、心と身体が震えました。播磨を代表する伝統校の校長を、若輩者の私が務めさせていただくという重みが全身にのしかかってきたのです。

あの日から、早や3週間。学校現場において担任とクラブ顧問しか経験していない私にとっては始業式の話、入学式の式辞、離任式の挨拶、そして校務運営委員会の出席、そのすべてが初めての体験です。何をすることも初心者マークがついてまわる私ですが、吉田教頭先生や上村事務長をはじめ、多くの先生方に支えていただいで大きなミスなく（と言って正しいか解りませんが）疾風怒濤の日々を乗り切ることができました。有り難うございます。これから生徒の成長のために、ともに歩んでいただきますよう、よろしくお願いいたします。

第79回 県立加古川東高等学校 入学式 式辞から 「なぜ学ぶのか」

世界に目を向けると、グローバル化、技術革新の進展など、時代は激しく変化しています。また、多発する自然災害や地球温暖化、国際情勢の不安定化についても日々、報道がなされています。あふれる情報を耳で聞き、あるいはあふれる映像を目にして、皆さんは何を思いますか。「大変だな」「この先はどうなるのだろう」という感想だけでしょうか。

今、世界は解決しなければならない様々な課題に直面しています。私達人間は英知を結集して、この困難に立ち向かわねばなりません。やがて皆さんは、それぞれの立場でこれらの課題解決を担う世代となるでしょう。そのために今が、力を蓄える時です。しっかりと学び、しっかりと人格を磨き、やがて第一線に躍り出たときに十分な力を発揮できるよう、成長するべき時は今なのです。

皆さんが、ここ加古川東高等学校で学ぶ意味はここに 있습니다。学ぶのは自分の将来のためであり、同時に社会全体をよりよくするためでもあるのです。